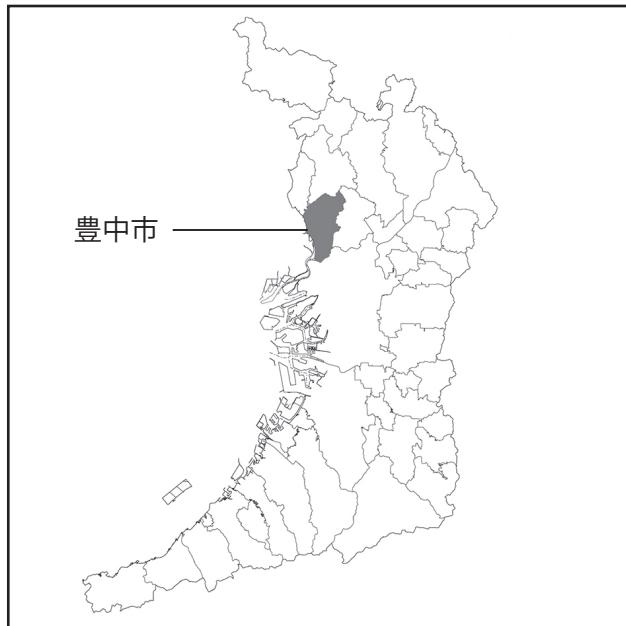
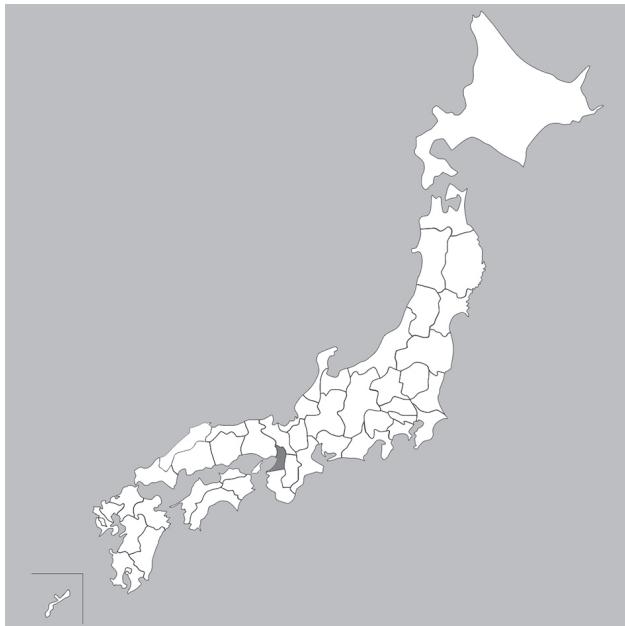


大阪府 豊中市



自治体基礎データ

【人口】396,749人（人口推計）

【面積】36.60km²

【出生数】平成28年度：3,534人 平成27年度：3,683人

【合計特殊出生率】平成27年 1.51

【人口流出人數】平成28年度：転入20,628人 転出19,659人
平成27年度：転入21,892人 転出20,006人

【未就学児童数（5歳以下）と世帯数】22,299人 世帯数は不明（2017年5月1日現在）

【未就学児童の年齢別数と保育状況】（2017年4月時点）

5歳児：1号認定 2,349人 2号認定 1,184人 在宅 253人

4歳児：1号認定 2,286人 2号認定 1,223人 在宅 286人

3歳児：3号認定 1,865人 2号認定 1,364人 在宅 539人

2歳児：3号認定 1,380人 在宅 2,313人

1歳児：3号認定 1,190人 在宅 2,505人

0歳児：3号認定 532人 在宅 3,027人

【保育所・認定こども園・幼稚園・地域型保育設置状況】

保育所など待機児童数 121人（2017年4月1日現在）

保育園：公立0件、私立42件

認定こども園：計40件（公立26件、私立14件）

（幼保連携型36件、幼稚園型4件、保育所型0件、地方裁量型0件）

幼稚園：公立0件、（私立3件…新制度に移行している幼稚園 19件…移行していない幼稚園）

地域型保育：計13件（公立0件、私立13件）（小規模保育事業A型11件、事業所内保育事業 2件）

【子ども・子育て支援関連予算額】

平成28年度：22685137千円

平成27年度：23035652千円

【それぞれの施策を進めるための府内体制について】

子ども施策推進本部（連絡）会議

【こども未来部こども政策課・こども相談課・こども事業課・子育て給付課、教育委員会生涯学習課・教育総務課・人権教育課・読書振興課・中央公民館・学校教育課・児童聖徒課・教育センター、人権政策か、政策企画部企画調整課、都市活力部魅力創造課、健康福祉部地域福祉課・障害福祉課・健康増進課、市民協働部くらし支援課】

【子ども・子育て支援事業について】（地域子育て支援13事業及び母子保健の実際）

利用者支援事業（特定型・基本型・母子保健型）、時間外保育事業、実費徴収にかかる補足給付を行う事業、多様な主体の参入促進事業、放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）、子育て短期支援事業、乳児家庭全戸訪問事業、養育支援訪問事業、地域子育て支援拠点事業、子どもを守る地域ネットワーク機能強化事業、一時預かり事業、病児・病後児保育事業、ファミリー・サポート・センター事業、妊娠健康診査

子ども・子育て支援及び高齢者対策を巡る自治体の特徴

大阪府内で北部に位置し、郊外住宅街として発達

総人口及び0～5歳の人口は微増

保育ニーズ増加傾向



豊中市役所

1. 子育て世代包括ケアに関する計画と事業内容

子育て世代は核家族化で転出入も多く、人と人とをつなぐ仕組みの必要性が高い。妊娠出産包括支援事業と利用者支援事業との連携による、子育て世代包括支援センター・豊中モデルを確立。

妊娠出産包括支援事業としては、母子手帳交付時には医療職による全数面接、子育てコーディネーターが情報提供と支援プランを作成、管理。2017年6月より産後ケア事業（宿泊・デーサービス型）を開始。同年10月から産婦健診も始めた。利用者には地域担当保健師の名前を記載した豊中市母子健康手帳別冊を配布。産科医療機関とは、要養育支援者情報提供票（大阪府内共通）を用いた連携のほか、市内および近隣分娩医療機関を保健師が訪問。市立病院の産科およびNICU病棟との連絡会議を開催している。

利用者支援事業（母子保健型）においては、社会福祉職による丁寧な情報提供と福祉的事案への対応を強化。妊娠出産包括支援事業として充実させるとともに、母子保健型と基本型の連携及び相談のワンストップ機能を強化、子育て世代包括支援センター機能を確立させた。

2. 利用者支援事業の詳細

基本型をすこやかプラザ2階の子育て支援センターほっぺで実施。社会福祉職1名が専任。

特定型を市役所のこども未来部子ども事業課入所入園係に設置、事務職1名が専任。

母子保健型をすこやかプラザ1階の中部保健センター、千里保健センター、庄内保健センターで実施。それぞれ社会福祉職1名が専任。

地域子育て支援センターを市立こども園16カ所に設置し、それぞれ保育士2名（地域支援保育士）を配置。こども相談課地域子育て支援係と連携。さらに発達支援係を中心に児童発達支援センターの立ち上げを準備中。学校との連携のため、こども家庭相談係に教育委員会児童生徒課併任職員を配置

3. 地域保健福祉をはじめとする地域づくりに対する自治体としての考え方

本市では41ある小学校区単位で市民活動（地域自治協議会、校区福祉委員会、公民分館活動など）が行われて来た歴史があり、福祉活動においては、身近な相談窓口である「福祉なんでも相談窓口」（地域住民主体の自助サポート）を民生委員児童委員と校区福祉委員が担つて来た。身近な地域で相談を受けて、相互の支え合いの中で解決する相談対応機能、それを支える日常生活圏域（7圏域、CSW配置）レベルでの地域福祉活動支援センター専門機関による相談支援機能、さらに市全体のバックアップ、セーフティネットを行う行政の責務を行う機能を充実させて行く。

住民活動が全てのベースであり、ボトムアップで進めて来た。

4. 介護及び高齢者施策と子ども・子育て支援施策との連携事例の有無

すでに全世代型の地域包括ケアを進めている。

小学校区単位で校区福祉委員会が実施する小地域福祉ネットワーク活動において、もちつき大会や伝承遊び、芋掘りなどの世代間交流事業が行われている。サロンやミニディ・サービスが住民主体で実施されており、そこでの交流も。

5. 地域保健福祉に関する協議体について

ア) 協議体の有無

小学校区ごとに設置している福祉なんでも相談窓口には、分野に関わらない相談が寄せられる。福祉なんでも相談窓口で集積された課題や、小学校区では解決できない課題などを話し合い、解決方法の検討を行う場として、日常生活圏域ごとに地域福祉ネットワーク会議を設置している。ここでは、介護及び高齢者、子ども・子育て支援、障害者に加え、保健、医療などの関係機関と連携し、分野を超えたテーマで小学校区から上がって来た地域課題を話し合い、解決方法の検討を行っている。さらに地域福祉ネットワーク会議で集積された課題や日常生活圏域では解決できない課題を話し合い、解決方法の検討を行う場として、地域包括ケアシステム推進総合会議を設置している。

イ) 協議体がある場合の体系と陣容

豊中市地域包括ケアシステム推進基本方針及び地域包括ケアシステム推進総合会議設置要綱に基づき、誰もが住みなれた地域で孤立することなく安心して暮らすことができるよう、支援を必要とする人の早期発見から支援につながるライフセーフティネットの構築を図るとともに、地域包括ケアシステムの全市的な推進を目的として、福祉・保健・医療の関係機関などが分野を越えて密接に連携・総合調整を行う「豊中市地域包括ケアシステム推進総合会議」および「地域福祉ネットワーク会議」を設置している。（64～65ページの図と表参照）

6. 地域団体・市民活動団体・企業などとの連携の状況

一層にあたる全市的協議体、地域包括ケアシステム推進総合会議（ライフセーフティネット総合調整会議）は、市関係部局、市社協、地域包括支援センター、障害者自立支援協議会、医師会、歯科医師会、薬剤師会、豊中市病院連絡協議会、池田子ども家庭センター、警察、大阪ガス、関西電力、郵便局、介護保険事業者連絡会などで構成、地域団体、市民活動団体、企業なども連携している。

日常生活圏域が二層にあたり、住民・福祉関係事業者・行政との情報交換や課題共有及び意見交換の場として、各圏域とも年2回ずつ地域福祉ネットワーク会議を開催、市関係部局、市社協、地域包括支援センター、民生委員児童委員、校区福祉委員、介護保険事業者等で構成されている。

このように地域自治および地域包括ケアの推進のため、地域団体・市民活動団体・企業および行政と関係機関が互いに連携を深めていくとしている。

7. 生活支援コーディネーター配置と人材養成についての、今後の予定
市社会福祉協議会に委託し、平成29年4月から第一層（市全域）として2名、第二層（日常生活圏域）として7名を配置している。（第一層のコーディネーターは第二層と兼務）
CSWと兼務の場合と専任の場合がある。
人材養成については今後検討していく予定。

回答者：こども未来部こども相談課長補佐兼子育て支援センターほっぺ所長 出口 裕子さん

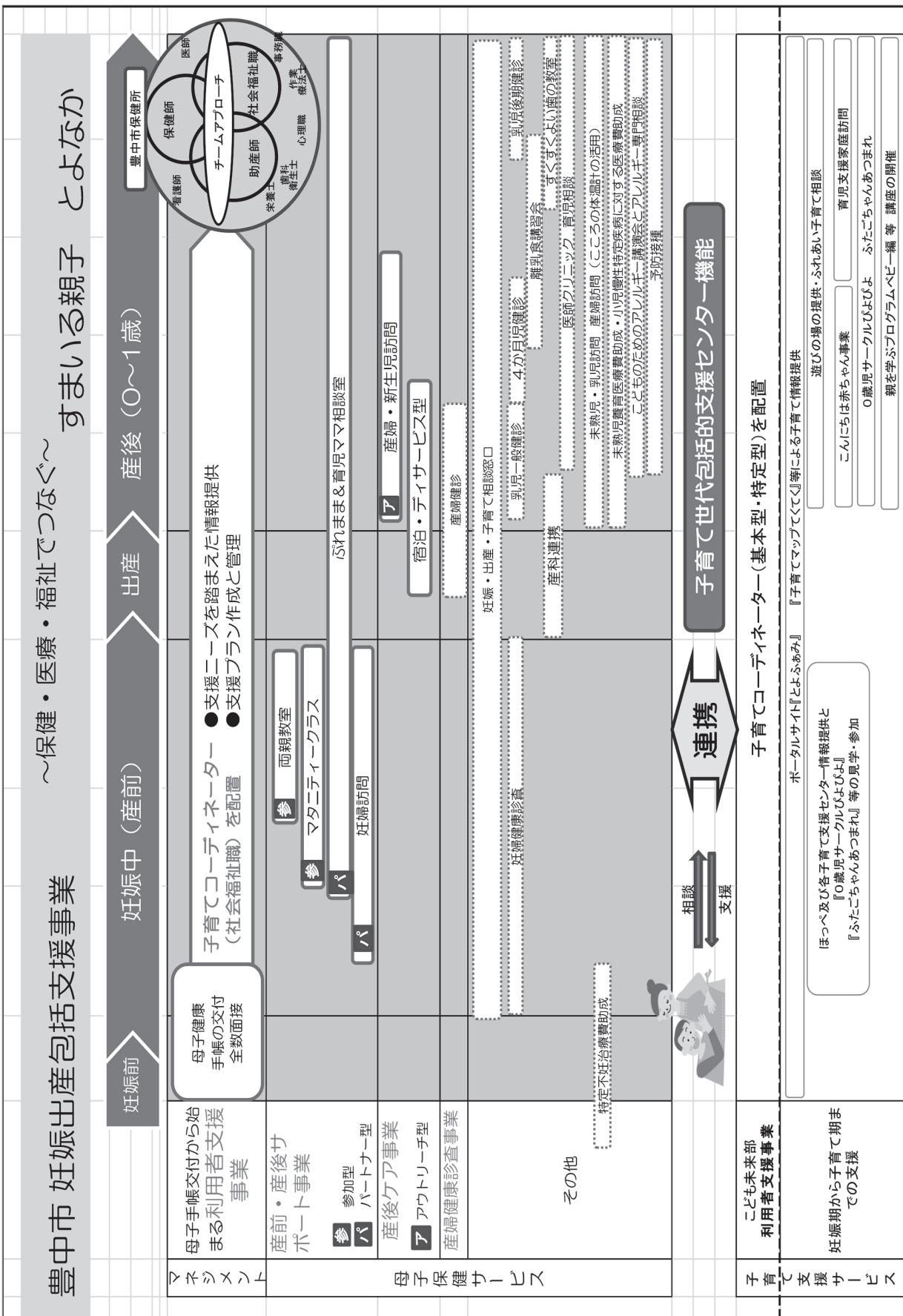
健康福祉部地域福祉課課長補佐 後藤 良輔さん

健康福祉部保健所健康増進課副主幹（保健師） 濱浦 弘美さん

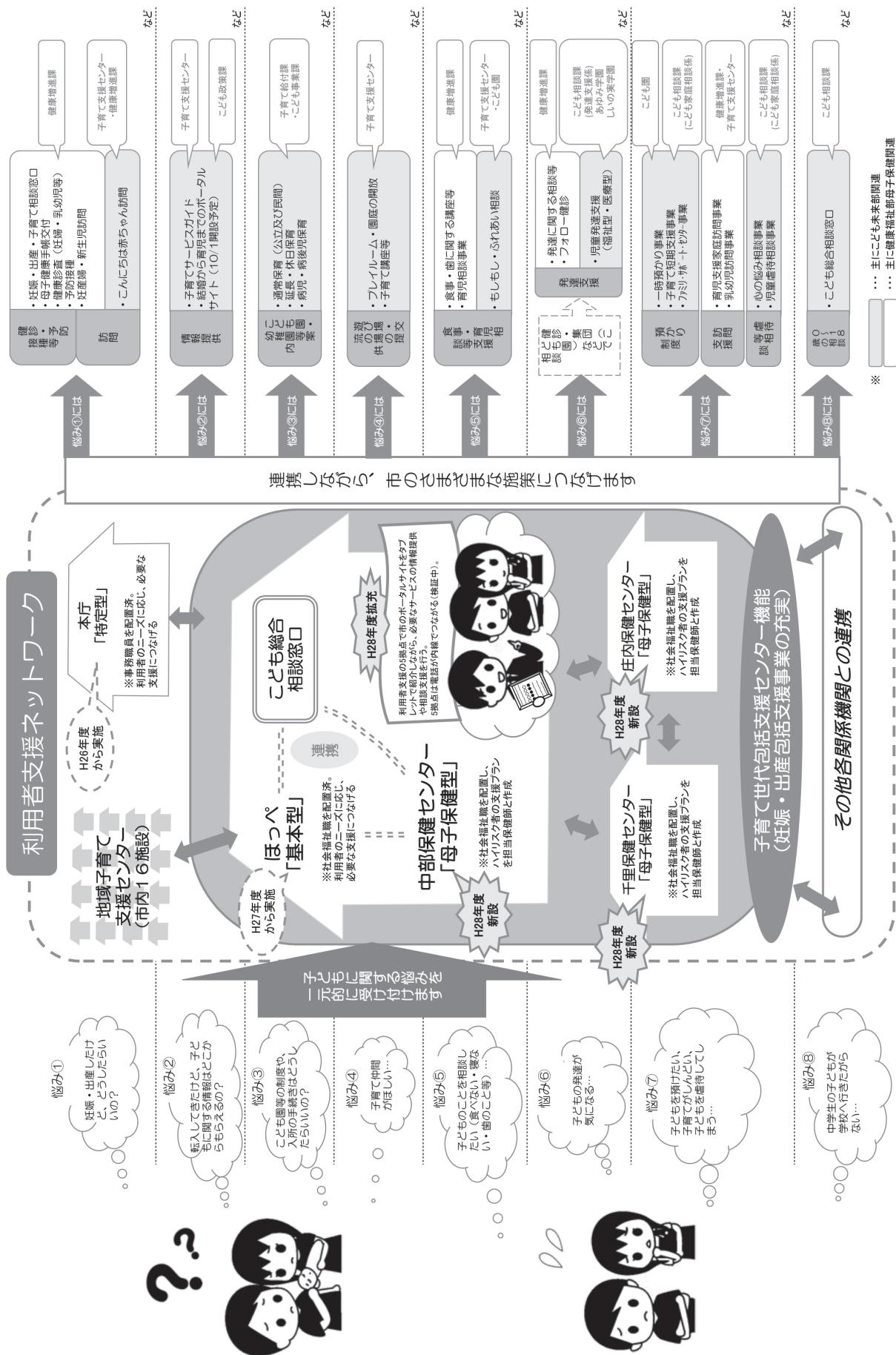
市民協働部コミュニティ政策課副主幹兼地域担当係長 若松 幸輝さん

豊中市地域包括ケアシステム推進総合会議推進体制

委員長	市長
副委員長	健康福祉部長
副委員長	健康福祉部保健医療技監
副委員長	豊中市社会福祉協議会 事務局長
市関係部局	健康福祉部 次長 保健所保健医療課長 保険長
	こども未来部 こども政策課長 こども相談課長
	市民協働部 コミュニティ政策課長 くらし支援課長
	環境部 環境事業長
	都市計画推進部 住宅課長
	教育委員会 学校教育課長
	財務部 税務・債権管理長
	上下水道局 経営部 お客さまセンター 窓口課長
	消防局 救急救命課長
府の機関	池田子ども家庭センター 企画調整課長 豊中警察署 生活安全課長 豊中南警察署 生活安全課長
関係機関 団体 事業者	豊中市医師会 会長 豊中市歯科医師会 会長 豊中市薬剤師会 会長 豊中市病院連絡協議会 会長 民生・児童委員協議会連合会 会長 校区福祉委員会会長会 会長 地域包括支援センター連絡協議会 代表者 介護保険事業者連絡会 会長 豊中市障害者自立支援協議会 会長 関西電力株式会社 大阪ガス株式会社 豊中市内郵便局代表・豊中庄本郵便局 局長 豊中南郵便局 局長 豊中郵便局 局長



子育て世代包括支援センター 豊中モデル



2. 利用者支援からつながる各種相談支援体制



いろいろな相談窓口
があるんだね。

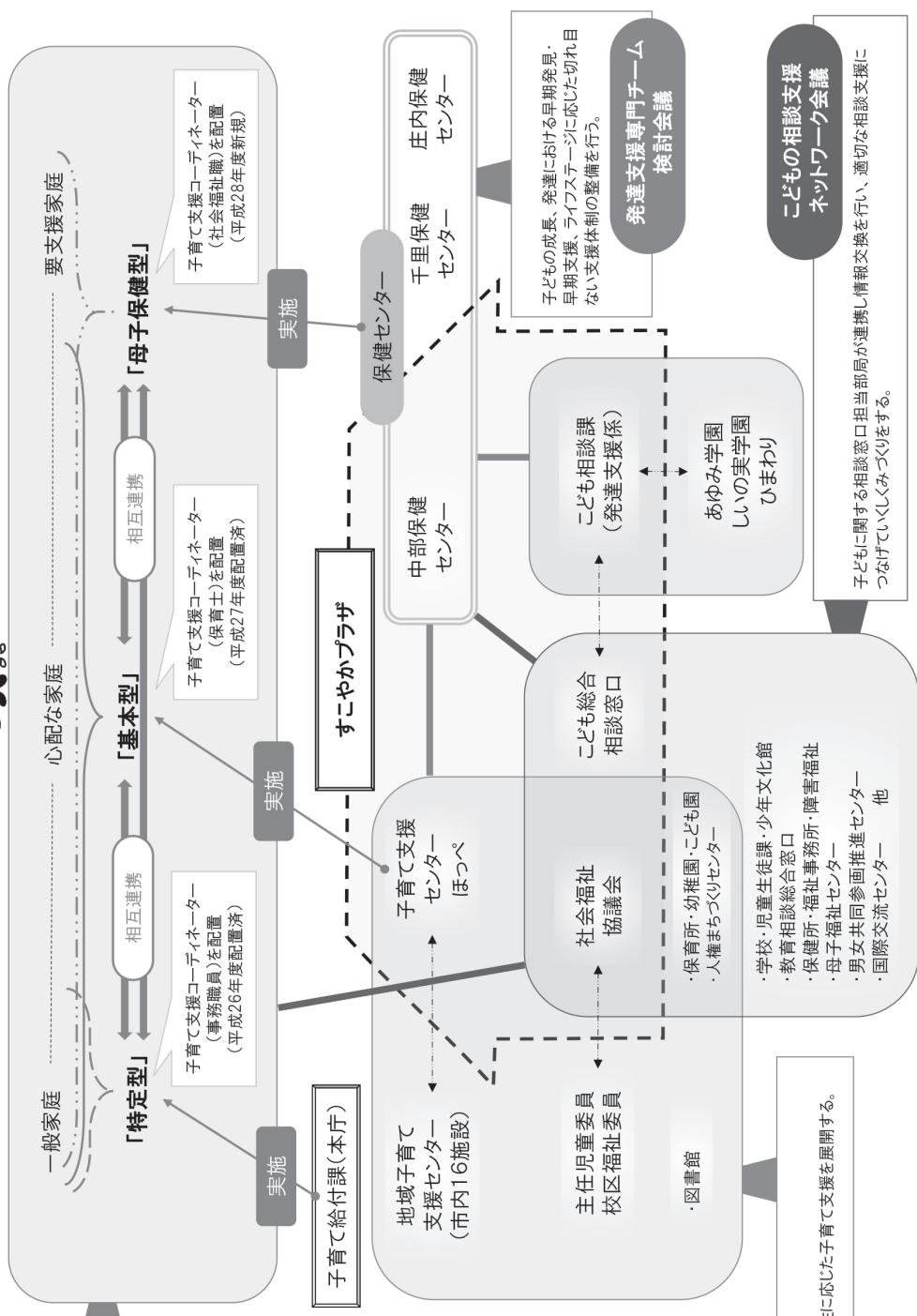
支援者利用

本市の多様な教育・保育サービスについて、必要なサービスを必要な人へ円滑かつ確実に結びつけるよう支援を行う。

以下の3つの型態を実施し、各施設に支授のための「子育て支援コーディネーター」を配置・各型態・支援体制によって職種は異なる。「子育て支援コーディネーター」は、子育て支援コーディネーターを基に、各型態同士で相互に連携・情報提供しながら支援に努める。

- 「特定型」(※特機児童が0になるまでの期間のみ)
場所: にこちも未来部子育て給付課(本庁)
- 配置職種: 事務職員
主な業務: 教育・保育施設への入所・入園関連等

- 基本型
- 場所：すこやかプラザ内子育て支援センターほか
配置職種：保育士
- 主な業務：教育・保育施設や地域の子育て支援など
の業務
内容：子育て家庭の相談や悩みの全般的な
受付等

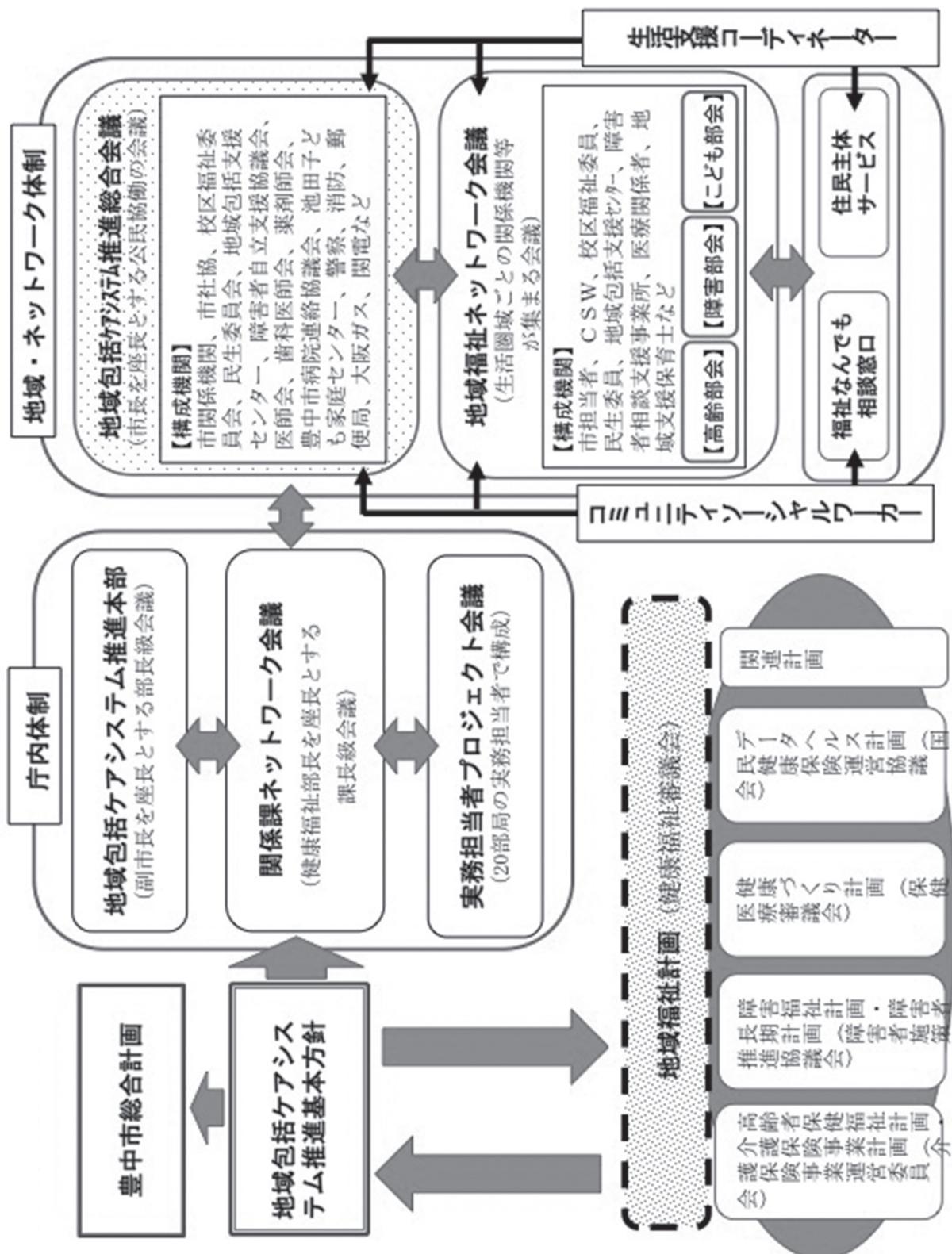


地域子育ち・子育て支援
ネットワーク会議

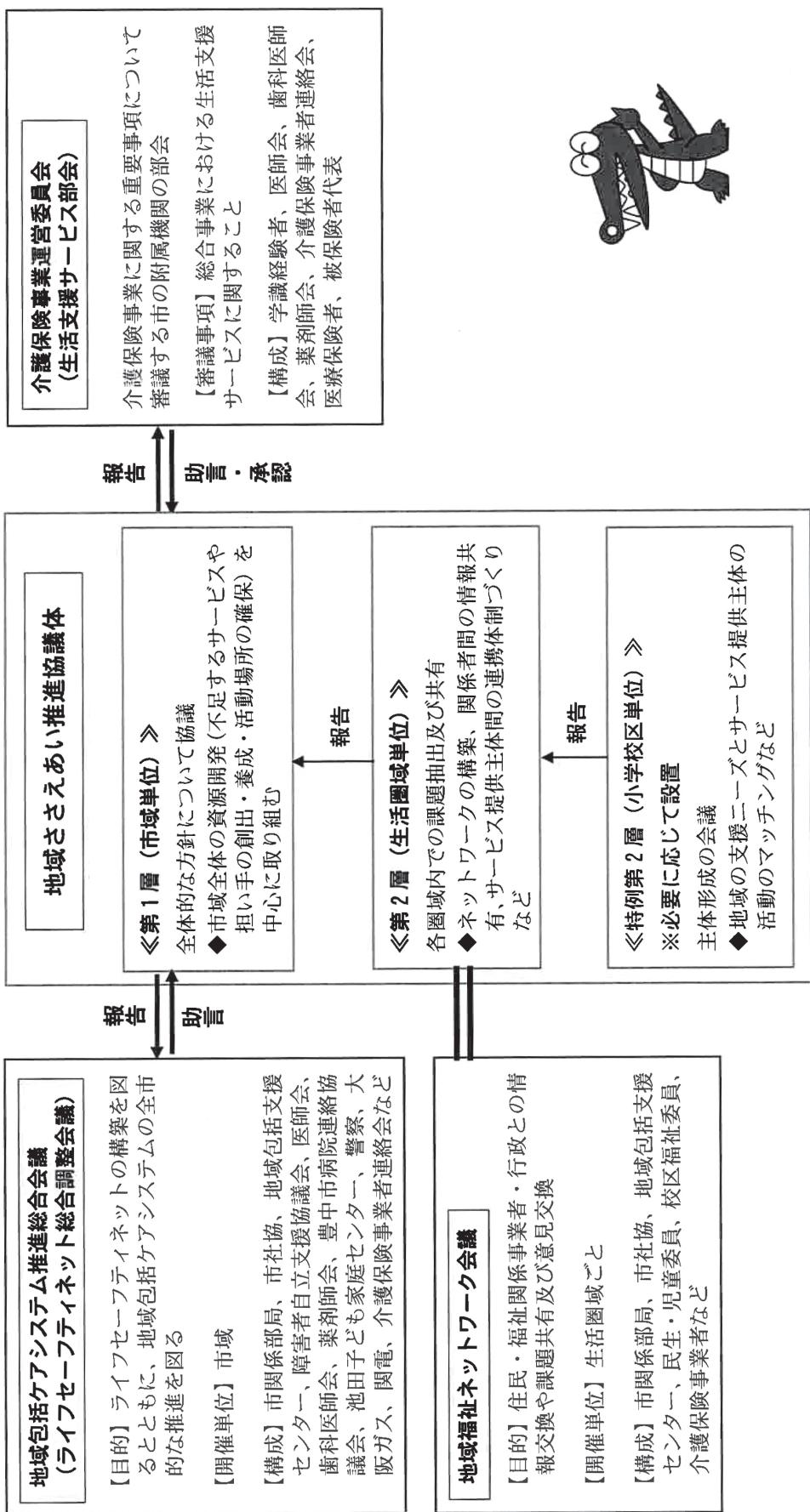
子育て関係機関・団体と連携し、各小学校ごとの地域性に応じた子育て支援を展開する。

ニどもの相談支援 ネットワーク会議

子どもに関する相談窓口担当部局が連携し情報交換を行い、適切な相談支援につなげていくづくりをする。



豊中市の協議体（地域さえあい推進協議体）



大阪府 豊中市 社会福祉法人豊中市社会福祉協議会

団体基礎データ

所在地：大阪府豊中市岡上の町2-1-15豊中市すこやかプラザ2階
従業員数：

ホームページ：www/toyonaka-shakyou.or.jp

事業概要

1. 主たる事業

2. ここに至るまでの経緯

昭和 58 年 法人格取得

昭和 62 年 賛助会費導入 *福祉のまちづくり講座、給食サービス開始

平成 4 年 校区ボランティア部会設置事業、福祉作業所連絡会…福祉のみせ「なかま」設置

平成 7 年 阪神・淡路大震災 豊中市内で 1 万戸が全半壊。ご近所が顔なじみだったことで、お互いの安否確認や救助活動につながり、日頃からの地域ネットワークの重要性が痛感され、翌年からの活動へ。

平成 8 年 小地域福祉ネットワーク活動開始

各校区で見守り・声かけ活動、サロン活動が始まる。

平成 13 年 介護相談員派遣事業開始

平成 15 年 こころのボランティア講座・ちょボラサロンへ

平成 16 年 地域福祉計画を市と協働で作成。*福祉なんでも相談窓口を各校区に設置

*地域福祉ネットワーク会議、コミュニティソーシャルワーカー (CSW) 配置

平成 18 年 運営推進会議へ参画

平成 21 年 福祉公社と統合

地域福祉権利擁護センター、地域福祉活動支援センター設置

厚生労働省モデル事業 安心生活創造事業開始

平成 23 年 パーソナル・サポート事業開始（～平成 24 年度）

国の緊急雇用創出基金の一環で豊中市からの委託により豊中び～のび～のプロジェクト開始

平成 25 年 生活困窮者自立促進支援モデル事業開始（～平成 26 年度）

平成 26 年 国の安心生活創造事業社会参加支援事業として豊中市からの委託により引き続き豊中び～のび～のプロジェクト継続実施

平成 27 年 生活困窮者自立支援事業開始

平成 28 年 豊中あぐり立ち上げ。都市型農園を拠点に社会参加（特に男性）を促進、地域福祉の担い手づくりをめざす。

平成 29 年 一步踏み出しにくかった若者の昼間の居場所づくり、社会関係づくりをめざし、豊中び～のび～のと豊中市小売商業団体連合会が社会福祉法人宝仙会の協力のもと「び～の×マルシェ」をオープン。

3. 関わって来たひと、もの、おかね

作り上げて来た人間関係と事業が財産？ 例えば、大阪府がコミュニティ・ソーシャル・ワーカー=CSW 設置を決め、その第一号となった勝部さんが知られるようになり、同時に CSW という仕事や生活困窮問題が注目されるきっかけは、豊中び～のび～のの利用者さんの中に漫画を描くのが得意な若者がいて、彼らが漫画で CSW の仕事について発信したこと、それが NHK の人の目にとまり、ドラマ化されたこと

だった。

4. 運営のコツ、運営上の苦労など

○主役はそこで暮らす住民。地域で本気で福祉をやっている人はいないが、1 校区 10000 人いるなかでボランティアが 100 ～ 200 人くらいいる。地域課題を住民自ら発見、解決する。手に余る課題は CSW とともに。

○本当のことは見ようとしないと見えない。困窮や孤立している人は特に見過ごされている。CSW は、そうした人たちを、ローラー作戦までやって拾い上げる。CSW に寄せる信頼は、そこにある。本人の意思を尊重しつつ、必要なプログラムとつなげ、地域での自立生活が行えるよう社会関係づくりを行うとともに、本人のエンパワメントを行う。例えば、発達障害者の家族会は、確かに貴重なコミュニティではあるが、ただそこで励まし合っていても課題は何も解決しない。家族会発足後 3 年経って、場所づくりや就労支援、社会関係づくりをめざして、引きこもり対応の豊中び～のび～のによる社会参加支援事業がスタートした。誰かをあてにせず、自分たちでやる。解決している人がしつかりしていることが何より大事。

ボランティアが 100 ～ 200 人くらいいる。地域課題を住民自ら発見、解決する。手に余る課題は CSW とともに。

○本当のことは見ようとしないと見えない。困窮や孤立している人は特に見過ごされている。CSW は、そうした人たちを、ローラー作戦までやって拾い上げる。CSW に寄せる信頼は、そこにある。本人の意思を尊重しつつ、必要なプログラムとつなげ、地域での自立生活が行えるよう社会関係づくりを行うとともに、本人のエンパワメントを行う。例えば、発達障害者の家族会は、確かに貴重なコミュニティではあるが、ただそこで励まし合っていても課題は何も解決しない。家族会発足後 3 年経って、場所づくりや就労支援、社会関係づくりをめざして、引きこもり対応の豊中び～のび～のによる社会参加支援事業がスタートした。誰かをあてにせず、自分たちでやる。解決している人がしつかりしていることが何より大事。

○阪神・淡路大震災で豊中市では 15000 世帯が全半壊と、大阪府内では最も被害を受けた。震災前に 41 小学校区のうちボランティア部会をつくっていた 4 校区では、どこに一人暮らしのお年寄りや寝たきりの人が住んでいるかわかつてたので、震災直後に安否確認に回り、救助につながった。その他の地区では知り合いを中心にしか助けられなかつた。顔がつながっていることが命を守ることに直結する。そこで、震災の翌年から、命を守ることの出来る地域づくりに取り組むことになった。小学校区ごとに、校区福祉委員会という住民の自主的なボランティア組織を設置。現在 41 校区で活動している。校区内の身近な福祉問題を解決するために、地域に組織されている各種団体の協力を得ながら福祉のまちづくりを進めている。具体的には、いざというとき助けが必要となる要援護者を対象に、見守りや声かけによる予防・予知・ニーズの発見活動、話し相手や買い物、通院の付き添いなどの個別援助活動をトータルで行う体制づくりを進める小地域福祉ネットワーク推進事業を全校区で実施。これらをより広げ、支えるためにグループ援助活動として、ふれあいサロンや子育てサロン、ミニデイサービス、給食サービスなどの福祉活動もあわせて行っている。活動に協力するボランティアを地域の広報誌などで一般的に呼びかけ、協力者を増やしている校区もある。

○課題や情報共有の場として、地域福祉ネットワーク会議を設置、介護保険の生活圏域（7 圏域）ごとに、年 2 回ずつ開催。これは CSW が主催、分野を越えた専門職の連携を目指し、行政の福祉関連部よく、

地域包括支援センター、福祉士悦、保健師、保育士などが参加。校区福祉委員会のメンバーも参加し、福祉施設や専門職との交流も生まれている。平成 25 年度からは「ケースメソッド」二取り組み、CSW に寄せられる複雑な課題に、それぞれの立場で協力できることを考えている機会となっている。分野ごとの部会（高齢者部会・子ども部会・障害部会）もある。市全体ではライフセーフティネット総合調整会議で地域課題を共有している。今回地域福祉ネットワーク会議にも参加させていただいた。

5. 地域における連携体制とその実情

6. 行政からの業務委託の有無

豊中市の地域福祉計画の実施計画を策定、実施していくのが社会福祉協議会。独自事業もあるが、市からの委託、助成事業もある。

回答者：勝部麗子さん 福祉推進室長
コミュニティソーシャルワーカー統括



地域福祉ネットワーク会議



びーのびーの元利用者が描いた「セーフティネット」
3部作も 2018 年 1 月 4 部作へ

地域包括及び子育て世代包括ケア 先進自治体調査

大阪府 豊中市 原田校区福祉委員会

1. 主たる事業

活動拠点である「遊友」での地域交流及び相談と支援

2. ここに至るまでの経緯

平成 29 年で創立 90 周年を迎えた豊中市立原田小学校の校区福祉委員会が運営する地域交流の場。平成 29 年で 20 周年を迎えた。阪神・淡路大震災後に豊中市で取り組み始めた小地域福祉ネットワーク活動の一環。

活動拠点の「遊友」は、地元と関わりのある方から無償で、豊中市に土地建物を貸与されたもの。

活動が活発に見える原田校区であるが、豊中市の資料によれば、自治会加入率は 17.1% と低く、一方高齢化率 27.1%、65 歳以上の一人暮らし高齢者世帯は 1051 世帯、14 歳以下の子ども率は 11.2%、小学校児童数が 412 人と、少子高齢化が進む。校区の広報誌「原田のふくし」では、会長が担い手募集記事を、副会長がこれからの福祉活動についてコラムを掲載。いかに若い世代に引き継いで行くかが課題。

3. 関わって来たひと、もの、おかね

原田校区福祉委員会副会長兼事務局長の戸谷友隆さんは、都市型農園「豊中あぐり」の運営委員でもあり、原田菜園を案内してもらいました。ミニデイ遊友を見学、一緒に盆踊りや手づくりのおやつを楽しませてもらいました。ミニデイ遊友を立ち上げ、育てて来たのは戸谷さんの妻。認知症が進み、徘徊などで対応が大変だが、ミニデイ遊友では認知症発症前と変わらずしゃっきりとした姿で参加。ミニデイ遊友でのひとときを過ごしたあとに、勝部さんから打ち明けられ、ヒアリングメンバー全員が驚いたくらい。ともに場を作り上げて来た仲間とともに、よい時間を過ごしている。自分たちで作り上げた居場所と仲間が、変わらず迎え入れてくれる素敵な循環。

4. 運営のコツ、運営上の苦労など

住民主体。

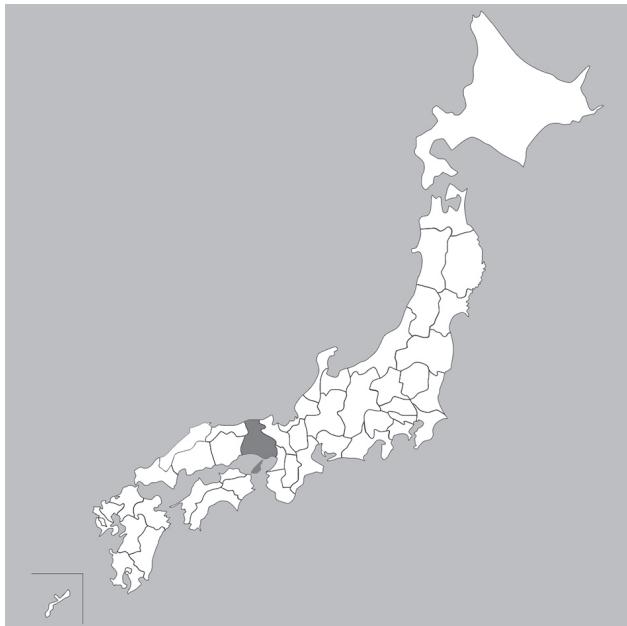
5. 地域における連携体制とその実情

原田校区福祉委員会のおとなりの豊中市中東部地域福祉ネットワーク会議で配布された参画機関・団体名簿には、幼稚園・こども園・保育所はもとより、放課後デイ、地域子育て支援センターといった子ども関連施設のほか、介護関連施設、障害者就労支援施設のほか、医療機関、警察、医師会のほか、行政関係部署など、ありとあらゆる関係団体が記されていた。ひとつの小学校区だけでなく、日常生活圏域という広域での定期的な会議で、さまざまな機関や人と顔つなぎを行い、連携体制を作っていることが伺えた。参加者全員に配布された圏域内での活動団体からのチラシは、まさに多岐にわたる内容で、これだけの情報を定期的に得られるだけでも、参加する価値があると思えるほど。社協発行の地域福祉ネットワークニュースを読むだけでも、市内のさまざまな取り組みの様子が分かり、参考になるというか、かなり刺激的。

6. 行政からの業務委託の有無

回答者：豊中市社会福祉協議会地域福祉推進室長 勝部麗子さん

兵庫県 明石市



自治体基礎データ

【人口】294,785 人 (2017.5.1 現在)

【面積】49.42km²

【出生数】平成 28 年度：2,713 人 平成 27 年度：2,652 人

【合計特殊出生率】平成 28 年度：平成 27 年度：1.58

【人口流出人數】平成 28 年度：転入 10,948 人 転出 10,207 人
平成 27 年度：転入 11,045 人 転出 10,492 人

【未就学児童数 (5 歳以下) と世帯数】16,357 人 世帯数不明

【未就学児童の年齢別数と保育状況】(2017 年 4 月時点)

5 歳児：1 号認定 1,498 人 2 号認定 1,161 人 在宅 119 人

4 歳児：1 号認定 1,403 人 2 号認定 1,198 人 在宅 167 人

3 歳児：1 号認定 240 人 2 号認定 1,153 人 在宅 1,249 人

2 歳児：3 号認定 1,062 人 在宅 1,688 人

1 歳児：3 号認定 864 人 在宅 1,894 人

0 歳児：3 号認定 353 人 在宅 2,308 人

【保育所待機児童数】 人

【保育所・認定こども園・幼稚園・地域型保育設置状況】

(2017 年 4 月時点)

保育園：公立 88 件、私立 422 件

認定こども園：計 30 件 (公立 13 件、私立 17 件)

(幼保連携型 30 件、幼稚園型 0 件、保育所型 - 件、

地方裁量型 - 件)

幼稚園：公立 0 件、(私立 0 件…新制度に移行している幼稚園 - 件
…移行していない幼稚園)

【子ども・子育て支援関連予算額】

平成 28 年度：17,732,262 千円 平成 27 年度：15,705,988 千円

【それぞれの施策を進めるための府内体制について】

府内組織数：

参画部署名：

福祉局

こども育成室 (保育所・幼稚園関係)

待機児童緊急対策室 (待機児童対策)

子育て支援室 (母子保健、児童虐待対策、ひとり親支援など)

高年介護室 (元気高齢者施策、要援護者高齢者施策、地域総合支援の推進、介護保険事業の運営など)

【子ども・子育て支援事業について】(地域子育て支援 13 事業及び母子保健の実際)

こども・子育てに関する支援のため、積極的に取り組んでいる。今年度 (平成 29 年度) は、市内児童養護施設と連携したショートステイ・トワイライトステイの充実化や養育支援訪問事業の拡充に取り組む。他明石市子ども子育て支援事業計画参照

子ども・子育て支援及び高齢者対策を巡る自治体の特徴

こども・子育て支援施策の効果で、平成 25 年以降、転入超過が続いている。主に、20 代 30 代と 9 歳までの子どもの数が増えており、子育て世代の人口の増加が顕著である。

また、平成 27 年からは、出生数も増加に転じている。



明石市役所

1. 子育て世代包括ケアに関する計画と事業内容

平成 28 年 4 月子育て世代包括支援センターを設置。平成 29 年 1 月 27 日に駅前再開発ビル 6 階に移転。市内 9 力所の母子健康手帳発行窓口を一元化し、保健師等による全妊婦面接を開始。面接の出来ない人については訪問、平成 29 年度以降は全て面接につなげている。面接では、生まれてくる子どもの視点で課題把握に努め、ハイリスク妊婦・特定妊婦の早期把握・早期支援を実施している。妊娠届の裏面にアンケートを印刷、無戸籍の可能性や DV の有無、育児困難の可能性（経済的困難、成育不能な事情、その他専門機関との連携が求められるケース）をスクリーニング、妊娠届出書のみではわからなかった実情把握とともに、妊娠期から妊婦と関係性を築き、出産後の支援につなげるなど、切れ目がない支援が実現出来ている。また、要保護児童対策地域協議会の事務局である子育て支援課等と連携を図り継続した支援につなげている。面接の出来た妊婦に対して、陣痛時や通院時等に利用出来る 5,000 円分のタクシー券を配付。さらに市内企業と連携した「あかしプレママブック」を作成し、面接の際に保健師等が説明・配付。また、医療と保健が連携した「養育支援ネット」を推進し、医療機関との連携も強化。職員は専任保健師・助産師 5 名を配置。今後は明石市の妊婦の現状や課題を整理し、産前・産後サポート事業や産後ケア事業を展開していきたい。

2. 利用者支援事業の詳細

平成 27 年 7 月から、市内で 6 力所開設している子育て支援センター（地域子育て支援拠点事業）のうち 2 力所で基本型を実施している。具体的には子育てナビゲーターを配置し、子育て家庭がニーズに合わせて、幼稚園や保育所などの施設や、地域の子育て支援事業などから必要な支援を選択して利用できるように、情報の提供や相談、援助などを行っている。相談の内容は保育所、幼稚園に関するものが多い。その他一時的な預かりや医療機関に関するものが多い。電話対応も少なくないが、プレイルームで相談を受けることが多い。相談件数（平成 28 年度：1,616 件）また、保育所の申し込みを受け付ける窓口において、相談員を配置し丁寧な相談をおこなっている。

3. 地域保健福祉をはじめとする地域づくりに対する自治体としての考え方

高齢者、障害者や子どもなど、広く地域の総合的・包括的な相談対応の拠点となる地域総合支援センターが核となり、高齢や障害による心身の機能低下や子育ての不安など、何らかの生活のしづらさがあったとしても、本人が家族や地域とのつながりをもってその人らしく暮らせるような地域づくりを行う。

4. 介護及び高齢者施策と子ども・子育て支援施策との連携事例の有無

ア) ある場合は、その内容と、これまでの経緯などについて教えてください。

支援ケースでは家族支援の中で連携をしている。

また、高齢者虐待、引きこもり、児童虐待を併せて、福祉職への啓発を目的としたシンポジウムを開催した実績はあるが、施策そのものの連携は今後（下記）

イ) ない場合は、両分野の連携についての予定や検討事案があれば教えてください

平成 30 年 4 月から、総合福祉センターを拠点とし、社会福祉協議会による一的な組織体制のもとで地域総合支援センターの運用を開始し、保健師や社会福祉士、主任介護支援専門員等の専門職による高齢者や障害者、子ども等の総合的・包括的な相談支援と、住民主体の多様な

支え合い体制の構築等、地域福祉の充実を目指した地域づくりを一体的に推進する。

5. 地域保健福祉に関する協議体について

ア) 協議体の有無

第 1 層と第 2 層の協議体を設置済み

イ) 協議体がある場合の体系と陣容

運営主体／明石市社会福祉協議会

＜第 1 層＞

○協議体／生活支援サービス検討会

○生活支援コーディネーター／元市職員 1 名

＜第 2 層＞

○協議体／地区社会福祉協議会を中心※（小学校区：貴崎、花園、藤江、和坂、鳥羽、沢池、大久保、山手、谷八木、大久保南、江井島、高丘東・高丘西、魚住・錦が丘、錦浦・清水）

※複数の会議体・組織体の群を協議体とみなしており、単一の協議体に限定していない。

○生活支援コーディネーター／地区担当職員 4 名

6. 地域団体・市民活動団体・企業などとの連携の状況

1 あかし子育て応援企業

平成 27 年度より、子育て支援に関する取り組みを積極的に行っている市内の企業、事業所を「あかし子育て応援企業」として認定することにより、企業による子育て支援への取り組みを促進し、地域で子育てを応援するまちづくりを進める。認定事業所数（平成 28 年度末：156）（実施内容）

- ・応援企業からなる実行員会によりイベント「あかし子育て応援メッセ」を企画、開催
- ・応援企業名と各企業の取り組みを市ホームページ等で紹介
- ・特に優れた取り組みを行っている企業を表彰

2 地域支え合いの家

地域総合支援センター構想のパイロット事業として、平成 29 年 4 月から地域ボランティア団体と連携し、概ね中学校区域を圏域とする、地域拠点である「地域支え合いの家」を設置し、介護や生活上の悩みなどの相談を受ける窓口となるとともに、子どもから高齢者まで誰でも利用できる居場所づくりなどを行っている。

3 第 1 層の協議体（生活支援サービス検討会）

生活支援コーディネーターと、まちづくり協議会やボランティア団体、生活協同組合、地域包括支援センター、介護サービス事業所、行政が定期的な情報共有を行い、連携強化を図っている。

7. 生活支援コーディネーター配置と人材養成についての、今後の予定

- 生活支援コーディネーターについては 5 イのとおり
- 人材養成については、6 月に専門職を対象に地域の宝物（地域に暮らしている人の知恵や工夫）の大切さを再認識する研修を開催した。8 月・10 月に地域で活動されている人を交え、地域と専門職とが一緒に地域の宝物を見る化する（生活支援コーディネーターと専門職と地域住民との協働による現地踏査・取材を含む。）ことで暮らしの中の自然な支え合いの意義を共有し、12 月以降に「お宝マップ」作成のための素材集めやお宝マップの作成、お宝自慢大会の開催を通じて、地域の社会資源の発見や開発の仕方を学ぶ。

回答者：明石市長 泉 房穂さん

福祉局こども総合支援部長 佐野洋子さん
 福祉局子育て支援室こども健康課長 春田幸子さん
 福祉局子育て支援室児童相談所準備担当係長 梶原 卓さん
 福祉局地域総合支援部長 松岡正純さん
 福祉局高齢介護室地域総合支援担当課長 十川勝吉さん
 明石市社会福祉協議会地域福祉推進課長 山本章博さん

○ (ヒアリングを通しての自治体考察)

市民にも浸透していく「まちのみんなすべての子どもを応援する」姿勢
 —生活支援体制整備モデル事業から

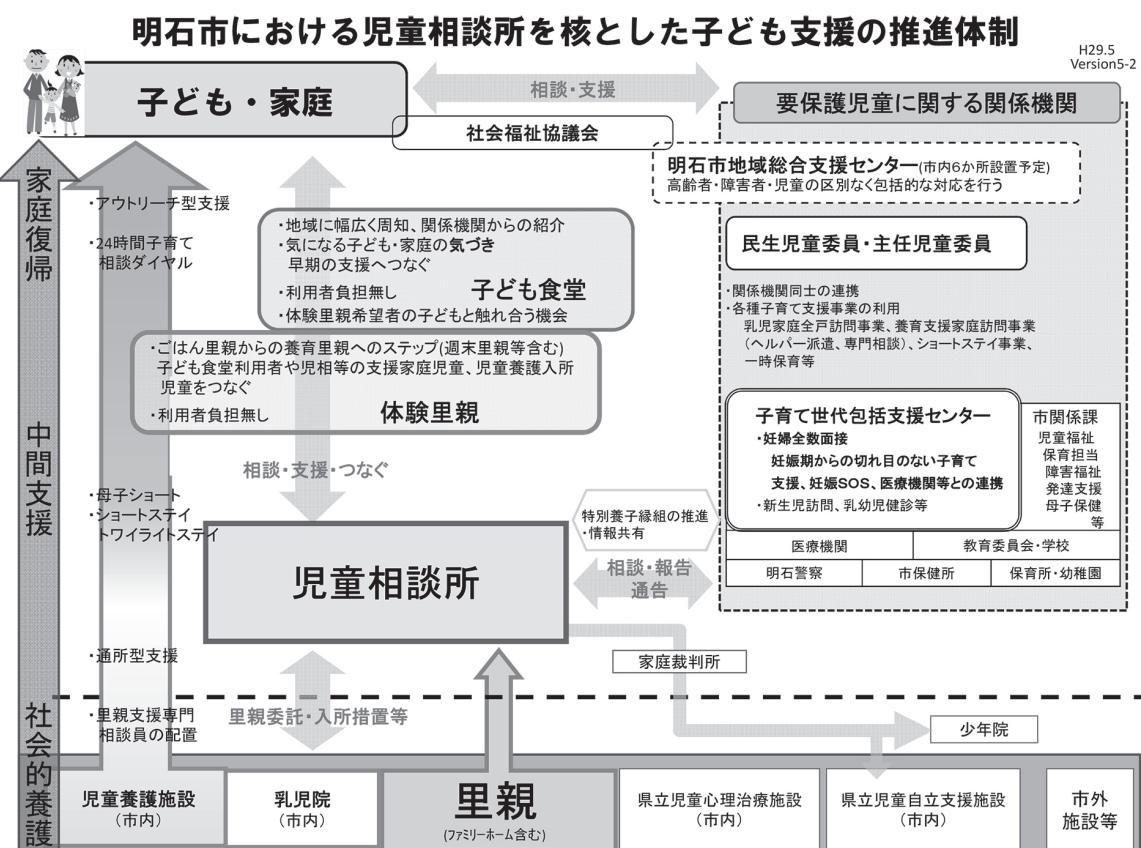
明石市長には、にっぽん子育て応援団結成8周年フォーラムにもご登壇いただき、きめ細かく充実した子ども・子育て支援の概要をお話しいただいた。「子どもを核としたまちづくり」を目指し、徹底した家庭訪問で必ず子どもの安否を直に確認するなど「ひとりの子どもも見捨てない」姿勢で、貧困や生活困窮、育児困難に陥る家庭や、離婚調停前から子どもをフォロー、面会支援まで行う。見捨てないのは子どもに限らず市民全員に対してで、地域住民をも巻き込んだ「支援を必要とするすべての人を大切にする」体制づくりも進めている。こうした取り組みを通じて、「まちのみんなすべての子どもを応援する」まちづくりにつながっている。現在、明石市では小学校区ごとに地区社会福祉協議会、町会・自治会、民生委員児童委員、ボランティア、PTA経験者などが中心となって、生活のし辛さがあったとしても、その人らしく暮らせるような地域づくりに取り組んでおり、小学校区に1カ所ずつの子ども食堂設置も進めている。また、平成29年度から全域での取り組みを進めるべく、生活支援コーディネーターの配置に伴い、市内2カ所の小学校区で生活支援体制整備モデル事業を行った。

平成27年度と28年度の2年間、藤江小学校区と山手小学校区で実施

されたモデル事業では、生活支援コーディネーターが中心となって、地域資源や住民ニーズの把握、困りごとに応じた新たな取り組みの開発に取り組み、その経緯は報告書にまとめられ、明石市の公式サイトでも見ることが出来る。

ヒアリングでは、この2カ所でのモデル事業の概要と、藤江小学校区で実施した全世帯に向けたニーズ調査の詳細などを聞いた。その結果、介護保険→地域包括ケア→新総合事業に伴う生活支援コーディネーターと協議体の設置が、複合的な課題にも対応できる「地域力」の掘り起こしと、乳幼児家庭も地域の仲間であることの確認と、乳幼児家庭にも目配りしたプログラム開発と担い手の発掘につながった経緯を確認できた。協議体という、地域のあらゆるステークホルダーが分野を超えた協議の場を持ち、地域住民のニーズ把握と課題解決に向けて検討するプロセスの中で、「子育て中の母親の孤立」「母親同士が気軽に集まれる場所の不足」に気づいた。課題解決に向け、赤ちゃんサロンの開催を目指すことになった。すでに明石市が実施している「こんなにちは赤ちゃん交流会」を見学、内容や部屋のレイアウト、運営方法などを学び、担い手の募集とともに、第1回が開催された。6組12名が参加、2回目は9組18名と数が増えていき、参加した親子が自治会掲示板、口コミ、SNSなどさまざまな媒体で情報を知り、参加していることがわかった。中には、同じ地区、同じマンションに住む住民同士がつながる場面もあった。また、孫を抱くと泣かれて困っていた自治会長がサロンの常連となったり、小学生親子がボランティアとして参加するなど、さまざまな世代が関わるようになって行った。こうして生まれた「赤ちゃんサロン in ふじえ」は、月1回開催で継続されている。

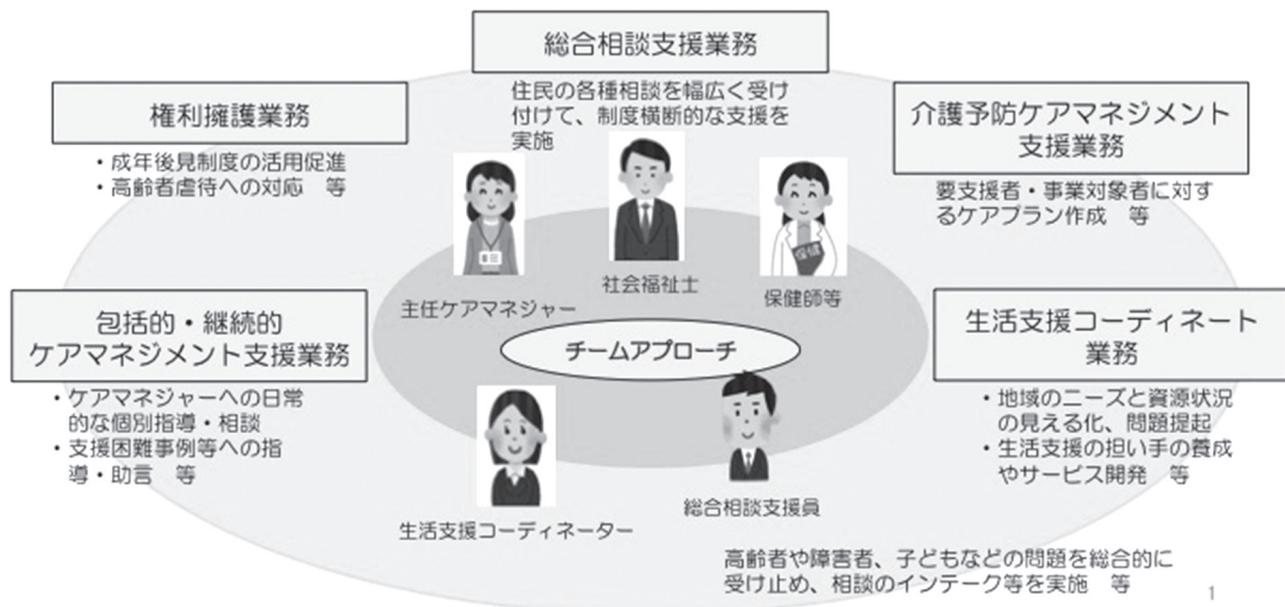
生活支援体制整備という「支援を必要とするすべての人を大切にする」体制づくりの中で、同じ地域で暮らす人同士が赤ちゃんサロンの運営に関わり、親子を支える居場所から地域の居場所へと発展させて行ったことは、素敵なおトピックであり、地域づくりのよいヒントとなるだろう。



地域総合支援センターの業務

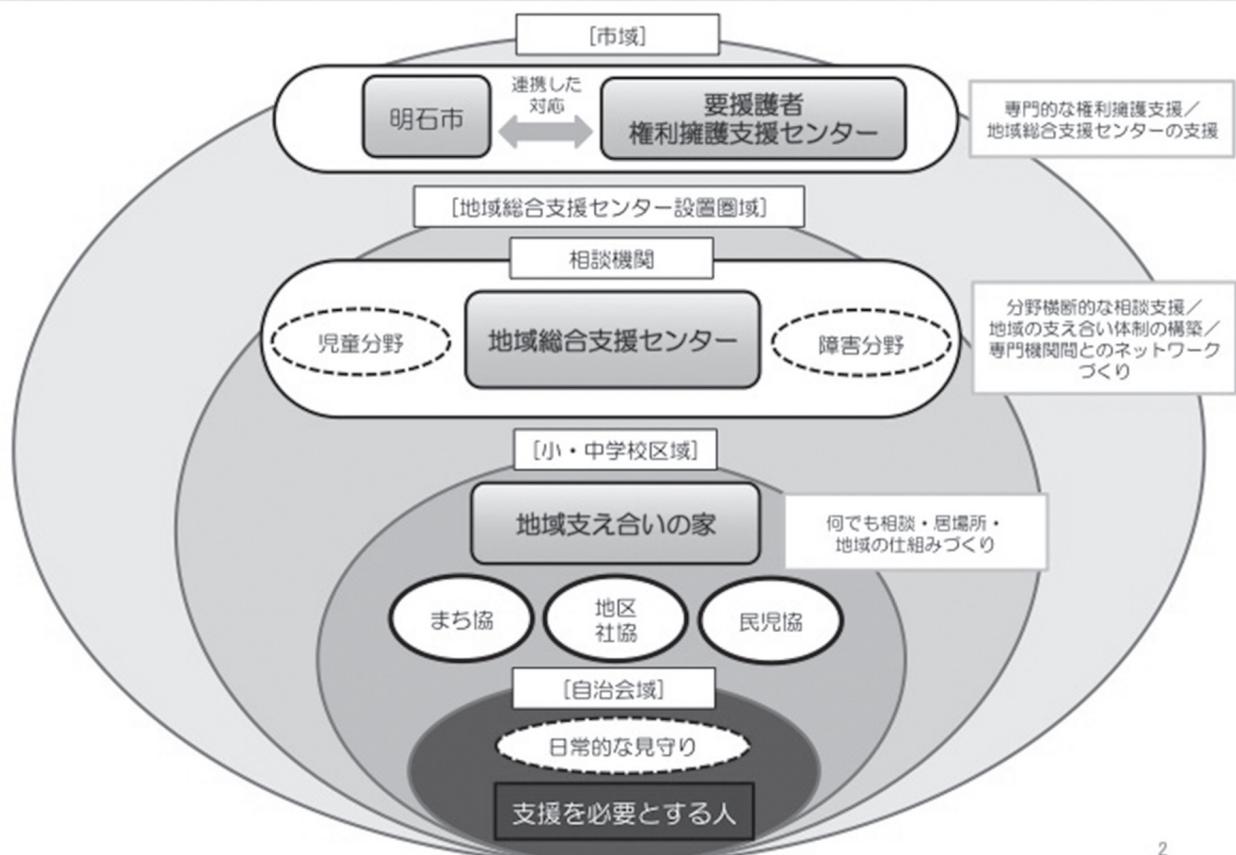
すべての人が安心して暮らせる地域づくりの一環として、問題を抱えながら暮らす本人や家族が、地域とのつながりをもって暮らすことができるよう、「社会的孤立ゼロ」を目指し、高齢者や障害者、子どもを含め広く地域の総合的・包括的な相談対応の拠点となる地域総合支援センターの整備を進める。

主な業務は、介護予防支援及び包括的支援（①介護予防ケアマネジメント業務、②総合相談支援業務、③権利擁護業務、④包括的・継続的ケアマネジメント支援業務）と、生活支援コーディネート業務等を行い、高齢者や障害者、子ども等の総合的・包括的な相談支援と、住民主体の多様な支え合い体制の構築等、社会資源の充実を目指した地域づくりを一体的に推進する。



1

明石市地域総合支援センター構想構成図



2

71

(参考)生活支援コーディネーター・協議体の役割

(1) 生活支援コーディネーターの配置

多様な主体による多様な取組のコーディネート機能を担い、一体的な活動を推進。コーディネート機能は、以下のA～Cの機能があるが、当面AとBの機能を中心充実。

(A) 資源開発
●地域に不足するサービスの創出
●サービスの担い手の養成
●元気な高齢者などが担い手として活動する場の確保 等

(B) ネットワーク構築
●関係者間の情報共有
●サービス提供主体間の連携の体制づくり 等

(C) ニーズと取組のマッチング
●地域の支援ニーズとサービス提供主体の活動をマッチング 等

エリアとしては、第1層の市町村区域、第2層の日常生活圏域（中学校区域等）がある。

- ① 第1層 市町村区域で、主に資源開発（不足するサービスや担い手の創出・養成、活動する場の確保）を中心
 ② 第2層 日常生活圏域（中学校区域等）で、第1層の機能の下で具体的な活動を展開
 ※ コーディネート機能には、第3層として、個々の生活支援・介護予防サービスの事業主体で、利用者と提供者をマッチングする機能がある。



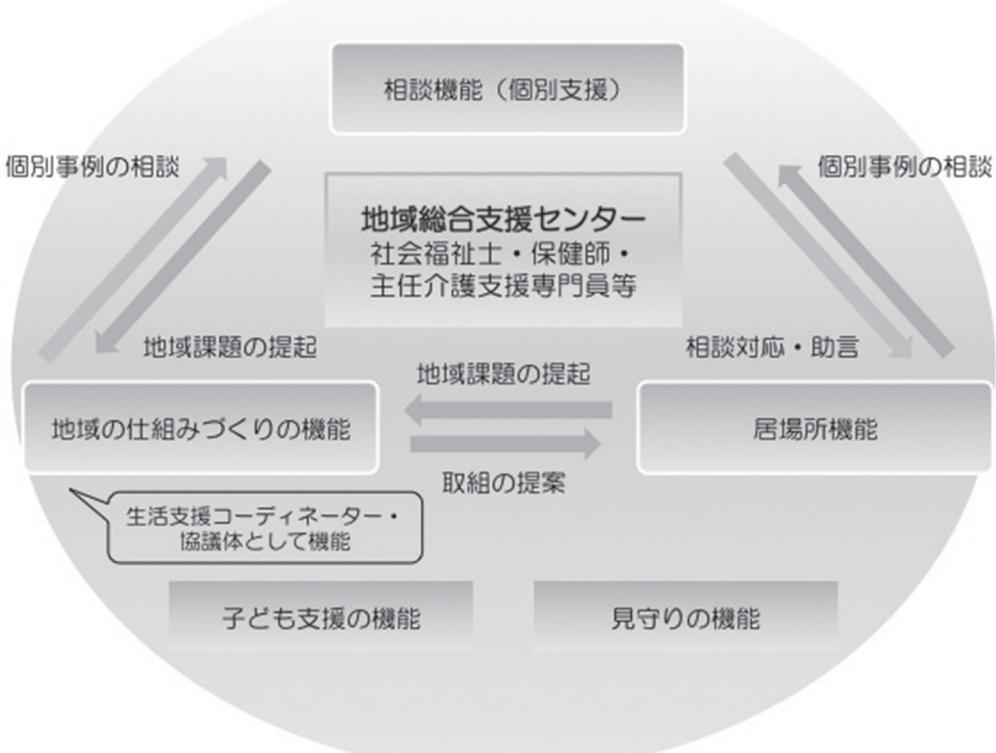
(2) 協議体の設置 ⇒多様な関係主体間の定期的な情報共有及び連携・協働による取組を推進

生活支援・介護予防サービスの多様な関係主体の参画例

NPO 民間企業 協同組合 ボランティア 社会福祉法人 等

3

地域支え合いの家（地域総合支援システムの地域拠点）



地域包括及び子育て世代包括ケア 先進自治体調査

兵庫県 明石市 社会福祉法人 立正学園 児童養護施設 カーサ汐彩
母子生活支援施設 カーサパスレル

団体基礎データ

所在地：明石市藤が丘2丁目36-1

(社会福祉法人立正学園 〒675-1202 兵庫県加古川市八幡町野村
617-4)

談に対応し子育ての不安・負担の軽減を図るために、明石市24時間子育て電話相談事業の委託を受けている。

・子どもの置かれた状況を把握し、必要な支援を早期に行うため家庭訪問や施設への来所により子どもの状況確認や日常生活に必要な支援を行うことで、子どもの健全な成長に寄与することを目的として、明石市アウトリーチ型支援事業の委託を受けている。

回答者：カーサ汐彩施設長 久保浩司さん

1. 主たる事業

児童養護施設「カーサ汐彩」および母子生活支援施設カーサパスレル

2. ここに至るまでの経緯

就学前の乳幼児の里親委託率100%を目指し、1.全28小学校区に里親を配置、2.児童相談所設置前から本気で取り組み、予算も他の児童相談所設置市の約6倍強（約860万円）を計上、3.地域のこども食堂などと連携、里親登録に向けて子どもの支援に興味がある人をサポートする体験里親制度（「ご飯里親（仮）」）を創設、取り組みを進めている明石市であるが、それでも緊急一時保護をはじめ児童養護施設が必要とする子どもの存在に対応すべきであると、平成29年4月に設置した。元は母子生活支援施設。

運営を委託された社会福祉法人立正学園は、子ども最優先、養育の専門性の提供、地域貢献を理念として、社会的養護を必要とする子どもたちの施設運営を行っている。

3. 関わって来たひと、もの、おかね

4. 運営のコツ、運営上の苦労など

コンパクトな施設の中にも多くの機能を備えた特色を生かしつつ、多様化する子育てのニーズに柔軟に対応した個別プログラムを提供出来るよう努めている。また、法人理念「子ども最優先」に基づき、小規模グループケアを基本とする家庭的な環境の中、子どもと職員が楽しく、日々新しい彩りを加えることが出来るような生活を目指して、ともに成長していきたいと考えている。

2階建てで、1階は、事務室及び調理室、心理療法室のほか、幼児の居室と女子、母子の居室、低年齢児の病児保育室を兼ねた療養室。2階は緊急一時保護室とショートステイ室、男子の居室になっている。1ユニットは6～8名で、居室のほか共同のリビング、台所とトイレ、浴室、洗濯室を備えている。食事は調理室で一括調理。

5. 地域における連携体制とその実情

施設のある地域の人々に子どもを中心とした活動に使ってもらうべく、地域交流室を開設。

地域との信頼関係づくりを兼ね、こども食堂の開催場所として、場所と食事を提供。

藤江小学校区の端に位置するため、二つの小学校区にまたがる感じで、地域の子育て家庭への訴求がしづらいところがある。市内の関係機関などとは密に連携している。

6. 行政からの業務委託の有無

明石市より

・仕事・育児等に追われ相談しづらい方からの相談や夜間等の緊急相



カーサ汐彩外観



カーサ汐彩内部

兵庫県 明石市 ボランティア・はなぞの

団体基礎データ

所在地：西明石南町 12-6-2

1. 主たる事業

- (1) 西明石・サポートファミリー（明石市が進めている地域支え合いの家事業）の運営。西明石サポートファミリーは、高齢者、子ども、障害者、要援護者、認知記憶症候群の人など、地域のすべての人の居場所。オープンは月曜日から金曜日の 10:00～16:00。誰でもふらっと立ち寄れる場所を目指し、定期的イベント（バーベキューや日帰り旅行）や手芸講座、高齢者のお楽しみランチ会などを開催。
- (2) 花園こどもレストランの運営。一般社団法人こどもサポートセンターと共同で花園小学校地区の「こども食堂」運営を担当。月に1回子ども食堂を実施し、高齢者と子どもたちが一緒に食卓を囲んでいる。一人暮らしの女性も利用している。夏休みはランチ食堂を実施、昼食と学習支援を行った。
- (3) 「ヘルパータレント」事業。登録してもらったボランティア1人につき 300～1000 円で、高齢者宅や乳幼児宅などの求めに応じて、1 時間ぐらいで終了する程度のサポートを行う。料金は、2 人 1 組で 1 時間程度の作業を原則として、部屋の掃除やゴミ出し、植木の剪定など、作業内容別に設定しているが、メニューがない作業についても相談に応じる。料金の2割をサポートファミリーの運営費としている。

2. ここに至るまでの経緯

28年前、松本さん自身が、地元の婦人会、子ども会、PTA とひととおり地域活動を経験したところで、地域の中で、地域とともに活動をしたい、地域の人と一緒に、この中学校区が住む人たちにとって魅力的な地域となり、終の棲家になるようにしたいと思い、団体を立ち上げた。阪神淡路大震災を経験、被災者支援の取り組みを中心に活動の場を広げて来た。

3. 関わって来たひと、もの、おかね

松本さんが中心となり、明石市や社会福祉協議会とも情報交換しながら運営してきた。市民派女性議員と出会い、4期16年の任期中、選挙運動から日頃の活動に至るまで、彼女の応援で市内を隈無く走り回ったことで、明石市のことなら隅々まで熟知、地域環境や考え方の違いを超えた人的ネットワークを培った。

困っているのは、やはりお金。西明石・サポートファミリーの場所代は明石市から出ているが人件費は出でていない。ヘルパータレント事業などボランティア活動から得たお金で、西明石・サポートファミリーの運営資金をやりくりすることもある。

4. 運営のコツ、運営上の苦労など

やめないで続けていくことが大事。「この場所に来てよかった」と言つてもらえることが、運営の励みになっている。集っている人の半分はお客様だが、半分はスタッフ。お客様としてきた人が手の足りない部分を手伝うなど、支援者と利用者の垣根がない。地域や環境も違うと思いつつも違うので、やれることからやっていく。地域がやさしくなり、思いやりの心を持ってくれるようになったと思う。

ヘルパータレントの登録ボランティアや戸別訪問、西明石・サポートファミリーの運営スタッフは、これはと思う人、ひとり一人に声をかけて増やして来た。里親になりたいという人には、子ども食堂への参加を勧め、子どもと触れ合うところから始めてもらうよう声掛けをしている。やはり一本釣りがベスト。

5. 地域における連携体制とその実情

何かあれば明石市全部とつながることができる。人と人、顔が見える関係を地道に作って来た。3. でも触れたように、市民派議員の応援で市内を隈無く走り回ったことで、地域それぞれの事情を熟知、人的ネットワークを培ったことが、各方面との連携や活動の幅を広げることにつながっている。

地域課題の発見には力を入れている。例えば、単身世帯が増えていることもあり、地域で孤立する人がいないように、安否確認も兼ねて会員と手分けをして一戸一戸声をかけ、状況に応じて専門機関とつなぐ訪問を行っている。民生委員児童委員さんとも情報交換を行いながら、気になる人を 150 軒、同じ地域に住む同じ人 2～3 名で毎月訪問する。6～7 年かけて、ようやくドアが開いた人もいる。ご近所だから立ち寄った風を装うのがコツ。継続しているからこそわかることがある。専門家と私たちとでは地域への入り方が違う。たまにしか来ない息子や娘にはわからないことでも、ご近所で日々出会っているから気づける。これが助け合いの一歩につながる。

また、不便な場所にあるマンションや大規模マンションの場合は、このような居場所に出かけて来るのが難しい人がいるので、マンション内にある空き部屋を借りて地域の居場所にでもしてもらうことも自治体に提案、協力してもらって進めている。

6. 行政からの業務委託の有無

介護保険の総合支援事業訪問型 B として、生活支援のヘルパー事業。明石市独自の地域支え合いの家事業。

明石市独自の小学校区に 1 力所設置の子ども食堂運営。（委託というよりは補助事業）

＜その他＞

- ・デイサービスを使っている高齢者でも、夕方からは地域の人になる。社会福祉協議会ともつながることが大切。若いママたちにもわかつてもらえる人を増やしていきたい。顔の見えるつながり作りを大事にしているので、商店街や通りで見かけたら、必ず声をかけるようにしている。そこからまた、気になる人の情報を得て、必要な場所につなぐこともある。
- ・この居場所は高齢者、障害者、乳幼児なども集まるので、民生委員児童委員とも情報交換をしている。
- ・介護保険の届け出用紙の最後に「頼りになるご近所の人の名前」を入れてもらっている。いざというときには、やはり近所の人の手が頼りになる。
- ・杖についている人や車いすの人などは、外出するのが難しいため、車で送迎できるよう、行政に車を出してもらえないかと相談している。

回答者：代表 松本茂子さん



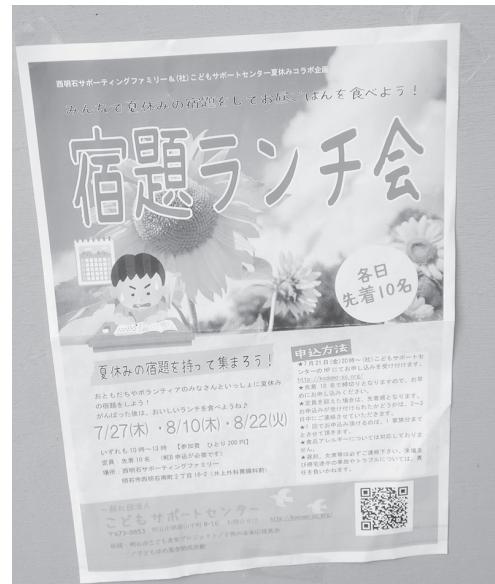
西明石サポーティングファミリー外観



地域の人々が気軽に立ち寄る

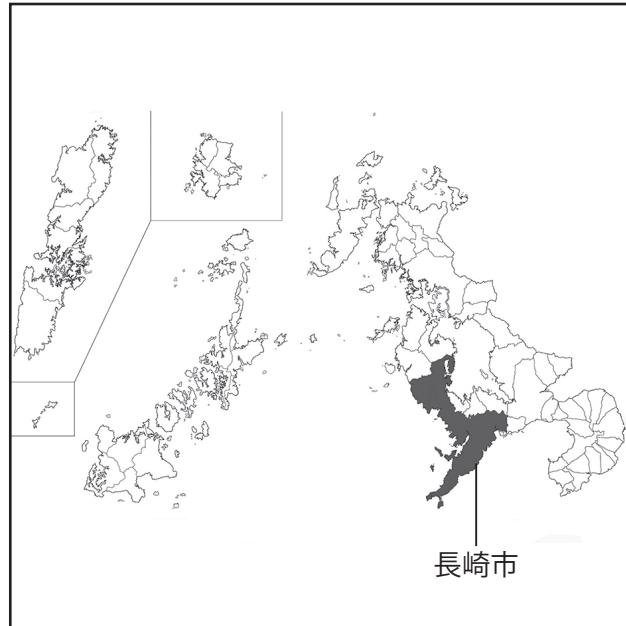
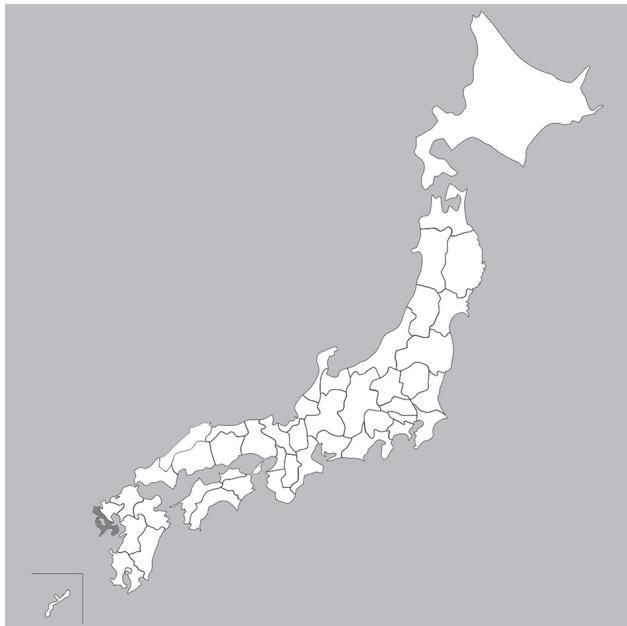


サポーティングファミリーカフェ



夏休みシーズンは宿題ランチ会で子どもをサポート

長崎県 長崎市



自治体基礎データ

【人口】429604 人

【面積】405.86km²

【出生数】平成 28 年度：3189 人 平成 27 年度：3188 人

【合計特殊出生率】平成 27 年 1.47

【人口流出入数】平成 28 年度：転入 14919 人 転出 16375 人

平成 27 年度：転入 15908 人 転出 15314 人

【未就学児童数（5 歳以下）と世帯数】人 世帯

【未就学児童の年齢別数と保育状況】（2017 年 4 月時点）

5 歳児：1 号認定 541 人 2 号認定 1858 人 在宅 不明

4 歳児：1 号認定 521 人 2 号認定 1869 人 在宅 不明

3 歳児：3 号認定 529 人 2 号認定 1879 人 在宅 不明

2 歳児：3 号認定 1922 人 在宅 不明

1 歳児：3 号認定 1644 人 在宅 不明

0 歳児：3 号認定 520 人 在宅 不明

【保育所待機児童数】人

【保育所・認定こども園・幼稚園・地域型保育設置状況】

（2017 年 4 月時点）

保育園：公立 3 件、私立 57 件

認定こども園：計 16 件（公立 0 件、私立 16 件）

（幼保連携型 16 件、幼稚園型 0 件、保育所型 0 件、

地方裁量型 0 件）

幼稚園：公立 2 件、（私立 3 件…新制度に移行している幼稚園 22 件
…移行していない幼稚園）

【子ども・子育て支援関連予算額】

平成 29 年度：26408077000 円 平成 28 年度：24757462000 円

【それぞれの施策を進めるための庁内体制について】

庁内組織数：

参画部署名：

【子ども・子育て支援事業について】（地域子育て支援 13 事業及び母子保健の実際）



長崎市役所

長崎市へのヒアリング

1. 子育て世代包括ケアに関する計画と事業内容

平成 18 年に県にこども部が誕生、市でも子ども未来部として子ども関連部署をまとめた。平成 20 年に母子保健及び小児医療関係を子ども健康課にまとめ、子ども未来部で子ども関連のすべてを対応する体制となった。

妊娠届時の全数面談は実現出来ていないが、アンケートを必ずとつており、支援質問票で集約、必要に応じて訪問・指導を行っている。年間出生数 3100 ~ 3200 のうち半数強に面談を行っている。

平成 28 年より産前・産後および母体ケアをスタート、育児支援につなげている。産後デイケア及びショートステイと産婦健診は、この 9 月からスタート。妊娠期からの切れ目ない支援を目指す子育て世代包括ケア体制が整った。

2. 利用者支援事業の詳細

母子保健型で実施している。助産師相談事業では産前の相談が多い。産後は保健師が訪問、新生児訪問は助産師が行っている。平成 28 年より県医師会に委託し、電話相談や訪問も始めた。

3. 地域保健福祉をはじめとする地域づくりに対する自治体としての考え方

(1)市の 13 の重点プロジェクトのなかで地域コミュニティの仕組みづくりプロジェクトを行っている。

概ね小学校区または概ね連合町会の区域を活動範囲とし、地域課題の抽出と解決に向けた、地縁団体や公的機関はもとより、市民活動団体、企業、地域のさまざまなステークホルダーが参画する定期的な協議の場「(仮) 地域コミュニティ協議会」を設け、まちづくり計画も策定、推進。

(2) 地域包括ケアシステム構築プロジェクト

団塊の世代が 75 歳以上となる 2025 年(平成 37 年)には、長崎市の高齢化率は約 35% となり、急速な後期高齢者及び認知症高齢者の増加が見込まれる。超高齢社会への対応として、誰もが住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるよう、地域ごとに必要な医療や介護、介護予防の提供体制を整備し、住まいや日常生活の支援を一体的に提供する長崎版地域包括ケアシステムの構築を進める。

そこで、このプロジェクトでは、在宅医療・在宅介護サービスの充実、医療・介護・福祉の連携強化、地域包括支援センターの機能強化、認知症の早期発見・早期対応、買い物や見守り等の日常生活の支援策、生きがいづくりや健康づくり、地域包括支援センターを中心に医療・介護・福祉の専門職が地域を遅延する体制づくり等の取り組みを進める。

4. 介護及び高齢者施策と子ども・子育て支援施策との連携事例の有無

平成 28 年 10 月より多機関型包括的支援体制構築モデル事業を実施。福祉分野に連携する複合的な相談をワンストップで受け止めて、解決までのコーディネートと伴走型の支援を行う多機関型地域包括支援センターを 2 力所設置市、子育て支援課、教育センター等と連携し、事業を実施している。

・相談支援包括化推進会議を地域包括支援センターの圏域を中心に実施、圏域の子育て支援センターやスクールソーシャルワーカー【教育研究所】、学校関係者等へ出席依頼。

北多機関型地域包括支援センターの相談支援包括化推進会議には SSW、地区担当保健師、琴海地区の保育所、幼稚園、学校【小・中・高】、

児童委員、学童クラブ、子育て支援センター等も参加。

南多機関型地域包括支援センターの相談支援包括化推進会議には SSW、地区担当保健師、子育て支援課、子育て支援センター、児童福祉施設、特別支援学校も参加。

・要保護児童対策協議会(研修・協議)に相談支援包括化推進員も参加。

・長崎市生活支援相談センター(生活困窮)、長崎県こども・若者総合相談センターゆめおとすと定期的な会議を行い、イベントを企画中。

・長崎県立大シーボルト校【看護学科】との連携で、長崎こども・女性・障害支援センター西彼保健所、長与町と一緒にひきこもりの実態調査について協議。

・ランタナカフェ(子育て連絡協議会)への参加。

などにより、複合的な課題を抱える世帯の子どもの問題について支援するために市内の関係機関と顔の見える関係を築き、ネットワークの構築を目指している。

2 力所のセンターに CSW を 3 名ずつ配置。北は長崎県立大シーボルト校、南は長崎純心大学と連携、アセスメントも行う。

すでに 8050 問題の次に来るであろう 704010 問題(認知症=70 歳、うつ=40 歳、不登校=10 歳という複合的な課題を抱えた家庭)を見出し、サポートに入っている。

5. 地域保健福祉に関する協議体について

ア) 協議体の有無

・地域包括ケア推進協議会

長崎版地域包括ケアシステム構築に向けて、医療・介護・福祉・法律・地域関係者で構成される地域包括ケア推進協議会を開催し、検討を行っている。

医療・介護連携部会

予防・生活支援部会(生活支援体制整備の第 1 層協議体)

イ) 協議体がある場合の体系と陣容

地域包括ケア推進協議会 予防・生活支援部会を第 1 層協議体とする。

メンバー: 医療・福祉・地域・学識経験者の分野から 16 名

長崎市医師会(かかりつけ医・認知症専門医)、長崎県栄養士会、長崎県指定認知症疾患医療センター、長崎地域リハビリテーション広域支援センター、長崎県作業療法士会、長崎市地域包括支援センター連絡協議会、認知症の人と家族の会長崎支部、長崎県弁護士会、長崎市民生委員児童委員協議会、長崎市保健環境自治連合会、長崎市社会福祉協議会、長崎大学地域包括ケア教育センター、長崎純心大学医療・福祉連携センター、長崎住まい・まちづくりトラスト、公募委員

6. 地域団体・市民活動団体・企業などの連携の状況

多機関型地域包括支援センターの活動において、地域アセスメントの実施

・福祉分野以外の事業所との連携を目指して、商工会、NPO 法人とも協議の場を設け、必要時連携できる体制を築くため、積極的に会議等に参加している。

・地域にかかる話し合いの場(地域コミュニティ推進室主催)へ相談支援包括化推進員が参加している。

地域コミュニティのしくみづくりが同時並行的に進められており、地域コミュニティ連絡協議会には地域のあらゆる機関や団体の参画を求めている。地域の実情に合わせて体制づくりを進めるもので、一斉に設置されるわけではないが、すでに 5 力所で協議会設置に向けた準備が始まっている。

地域コミュニティのしくみづくりは年間予算2億円程度を計上、資金支援を行うほか、人材への支援や拠点の支援（39の中学校区ごとの地区公民館や17カ所あるふれあいセンター等を活用）も行う。

回答者： 子ども未来部子育て支援課係長 山口照光さん
子ども未来部子ども健康課長 高橋秀子さん
地域コミュニティ推進室係長 福田直美さん
地域包括ケアシステム推進室係長 谷美和さん

地域コミュニティの仕組みづくりと多機関型地域包括支援ケアセンターによる複合課題への支援体制づくりで、重層的なサポート・ネットワークを構築しようとしている格好。

7. 生活支援コーディネーター配置と人材養成についての、今後の予定

平成30年度からの生活支援コーディネーター配置に向けて、第1層協議体である長崎市地域包括ケア推進協議会予防・生活支援部会のメンバーから、生活支援体制整備について協議するワーキングを設置（委員は7名）、今年度3回の協議を行い、予防・生活支援部会に報告（10月4日現在）。

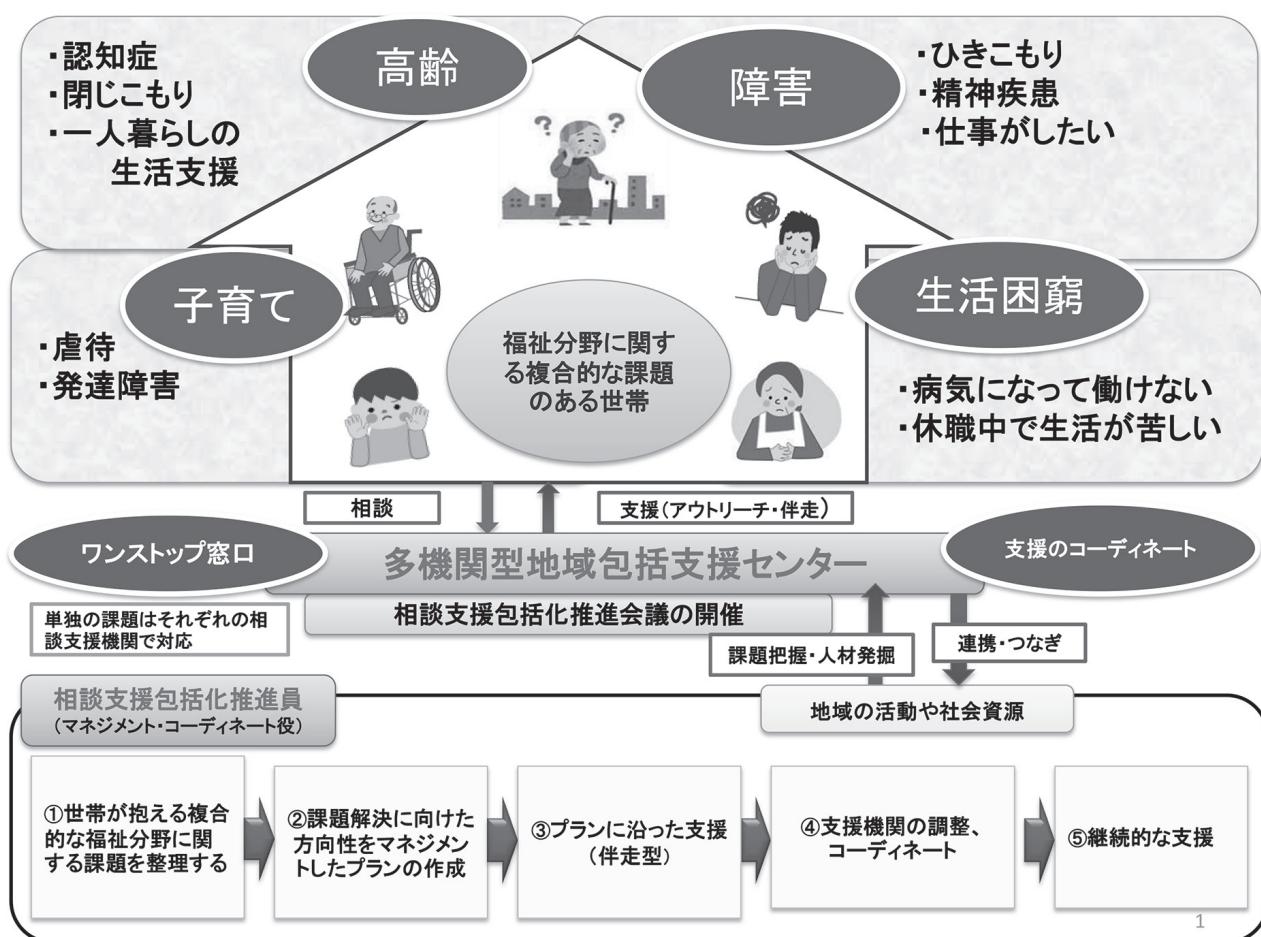
現在考えられている工程表によれば次の通り。

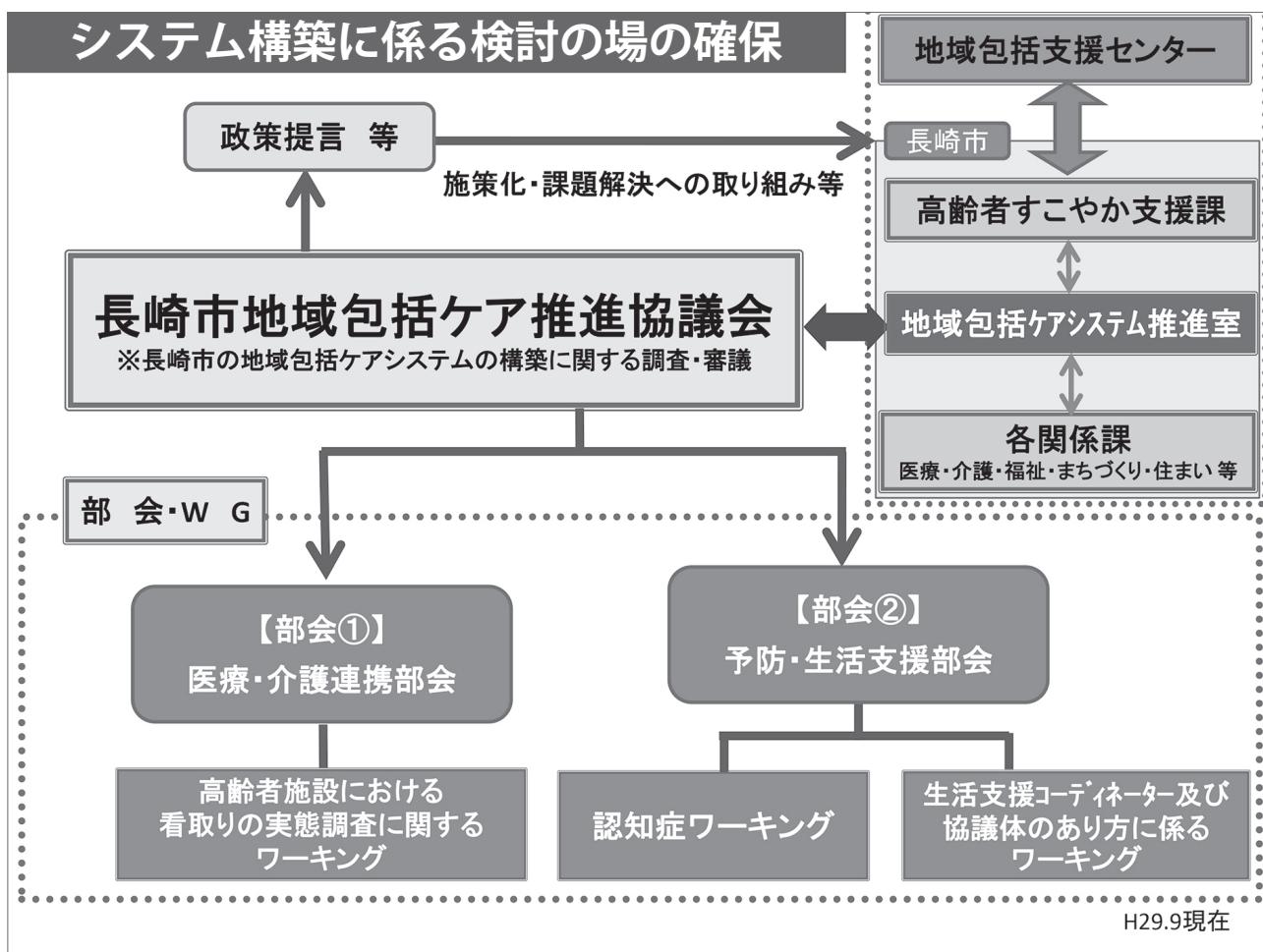
第1層 1名

第2層 包括の圏域である20圏域1カ所辺り1名～数名（各センターの社会福祉士等）

第3層 地域コミュニティ連絡協議会および社会福祉協議会主催の会議で課題を住民で共有、

ボランティアポイント制による、住民主体のサロンや介護予防講座等の取り組みなど





長崎県 長崎市 自然と暮らしの学校 てつなぐ

団体基礎データ

所在地：〒 850-0821 長崎県長崎市高平町 15-1

従業員数：2名

ホームページ：<https://www.facebook.com/tetsunagu/>

事業概要

【これまでの事業の歩み】

2014年11月 自然と暮らしの学校「てつなぐ」設立

2015年5月 こどものたまり場・大人のはなす場「かっちえて」オープン

【事業別利用者数と内訳】かっちえて：2016年度実績：月12回程度開催、延べ2,445人利用

1. 主たる事業

自然と暮らしの学校「てつなぐ」(以下「てつなぐ」)は、来る人たちが、『ありのままの自分を認めてもらえるんだ』『失敗してもいいんだ』『自分の人生は自分で考えて決めていけるんだ』というような、安心感を得られる居場所(たまり場)づくりを行っている。

1) こどものたまり場・大人のはなす場「かっちえて」

誰でも来られる地域のたまり場です。

参加費無料、申し込み不要、プログラム、タイムスケジュール一切なし、いつ来ていつ帰ってもよく、障碍の有無も問いません。年齢は0才～200才まで、誰でも来られます。長崎の繁華街から徒歩10分程度の場所にある、築約100年の古民家である自宅を開放しています。「かっちえて」とは長崎弁で「仲間に入れて」という意味です。

2) かっちえてさん家のゴハンの日(こども食堂)

誰でも0円でゴハンが食べられる日です。かっちえて開放日の中で、月1回程度開催しています。皆で一緒にゴハンを食べることの喜びや楽しみを分かち合う場であり、「おいしいね」と言い合える人が隣に居る、笑顔溢れる会話が広がる食卓の場を、集まった人たちと囲みます。

3) てつなぐのまどい

「話を聴いてみたいな」と思うゲストに、その方の活動や想いを話してもらう場です。「まどい」とは人々が円(まる)く居並ぶこと、車座になることを意味しています。10人～15人程度の少人数での対話を大切にしています。

4) 学びのシェア会

てつなぐ運営者の2人(けんちき・かおるこ)が、他団体の視察・見学や、ワークショップ等で学んだことを、集まった方々にシェアする場です。10人～15人程度の少人数での対話を大切にしています。

5) ながさき円坐

集まった数人と輪になって数時間、時には数日間一緒に座ります。目的やテーマは何も決まっておらず、その時に浮かんだことを話したければ話し、話したくなれば話さなくてもいい場です。時には数時間沈黙が続くこともあります。会社や社会的な役割や肩書、家族の中での役割(夫・妻・父・母・子ども等)を一切無くして、そのままの「自分」として人と対峙する場です。

2. ここに至るまでの経緯

「てつなぐ」は、2013年11月に、片山健太・薫子夫婦二人で立ち上げました。主には、「こどものたまり場・大人のはなす場“かっちえて”」

という、地域のたまり場の開放をしています。かっちえては、“住み開き”というスタイルで自宅を開放し、2015年5月にスタートしました。

私たちは、一年間の山村留学や、夏休み・冬休みのこどもキャンプを主催する団体で働いていました。そこには、「違いは豊かさ」を合言葉に、お互いを認め合う環境がありました。自然豊かな里山での、仲間との暮らし。それはとても充実したものでした。

でも、活動を続ける中で浮かんできたジレンマがありました。このような活動には、経済的に豊かな家庭(参加費が支払える家庭)のこどもか、親の理解があるこどもたちしか参加できないのではないか?

「こどもが自分の意思で何をしたいかを選びとれたらいいのに…」「おもいきり遊ぶこと”や”仲間との時間”が必要な子は、もっと他にもいるんじゃないだろうか?」そんな共通の想いが2人にあり、「こどもたちが自分で歩いて来られる場所で、参加費も申し込みもいらない、自由に過ごせる場所を地域につくろう!」と、夫婦2人でたまり場づくりを始めました。

3. 関わって来たひと、もの、おかね

○工事を担当してくれた大工さん

てつなぐの活動拠点である、築約100年の古民家は、改修工事から地域のこどもたちと行いました。こどもと一緒に、こどもが試行錯誤できる、こどものペースに合わせた工事をしたい。そんな無茶なお願いを快諾してくれた大工さんの存在が、今までつなぐの壁を作ってくれています。お陰で、かっちえてオープン前から地域のこどもたちと密な関係性が築けました。

○かっちえてに遊びに来てくれる、こどもたち

かっちえての広報は、月に一度、地域の小学校の門の前に私たち2人が立って、直接こどもたちにチラシを手渡しするのみです。当然全員には行きわたりません。ですので、一番の広報はこどもたち同士の「口コミ」です。最初に来てくれたこどもたちが次々に友達を呼び、次第に広がっていきました。彼らなくして「かっちえて」や「てつなぐ」の継続はありません。

○応援してくださる全国の方々

無料でのたまり場の運営は、当然資金面は厳しく、試行錯誤をしながら何とか団体を継続している状態です。その中の工夫の一つが、「支出をなるべく出さない」ということです。たまり場で使う物(マッチやのこぎり、七輪、うちわ等々)や、こどもたちに配るチラシの紙やプリンターのインク、ゴハンの日に使うお米など、ほとんどの物品は寄付で賄っています。その寄付は、SNSなどを通じて、てつなぐを知ってくれた方や、私たちの昔からのご縁のある方々など、全国各地の方が応援してくれ、物品を送ってくれています。インターネットが普及した現代だからこそ成り立つスタイルであり、このような皆さんのお援が団体の継続に大きな力を貸してくださっています。

4. 運営のコツ、運営上の苦労など

・「〇〇支援」と敢えて看板を掲げないことで生まれる、様々な出会い“かっちえて”は、敢えて対象を絞った看板を掲げないからこそ、いろんな人達・いろんな価値観、色んな人生の在り方と出逢える場になっています。ここは、肩書や学歴、職業、何に属しているのか、あるいはどんな問題(障害)を抱えているか、は関係なく、何のラベルも貼られないで、その人のそのままの姿と出会って過ごします。“分けない”関係の中だからこそ、幼児～お年寄りまでの幅広い年齢層の、豊かな関係性が生まれています。

そのために参加費無料、申し込み不要で運営しており、対象も絞らず、

皆が自分の足で歩いて来られるように、敢えて街の近くに拠点を構えました。「〇〇支援」と看板を掲げないことで、結果的に様々な人たちと出逢うことができていることが運営の一つのコツであり、大切にしていることです。

・プログラム、タイムスケジュールがないということ

“かっちはえて”は、プログラム、タイムスケジュールが一切ありません。なので、来た人それぞれが、自分の思うように過ごします。ハチャメチャに遊ぶ子どもたちもいれば、静かに座ってぼーっとしている大人もあります。周りに合わせる必要がなく、それぞれが自分の居たいように過ごせるからこそ、居心地の良い空間が生まれ、結果、多くの人が集まるのだと感じています。(2016年度実績:月12回程度開催、延べ2,445人利用)

5. 地域における連携体制とその実情（地域とのお付き合いの仕方）

地域との連携で何か事業やイベントを開催したという実績はありませんが、活動を始める前の地域への入り方はとても注意深く行いました。てつなぐの活動において、地域の方からの理解を得ることは非常に重要であると感じていましたし、活動を地域で継続していくには、近隣の方との関係性を良好に保つことは大切だと考えているからです。

例えば私たちは、てつなぐの活動開始前から、近所の小学校で開催している「放課後子ども教室」にボランティアとして参加させてもらいました。結果、学校の先生方や子どもたちに顔を覚えてもらい、人間関係を作り、人柄を知つてもらいました。また幸運なことに、その取り組みで知り合ったシニアボランティアの方々が地域の重要な役割を担っている方々ばかりで、その方たちが私たちの活動を応援してくれたことも心強いことでした。放課後子ども教室の会長Aさんは、私たちの活動拠点の地域の自治会長Bさんと、育成会等で昔から知り合いでしたので、Aさんを通してBさんに繋げていただき、Bさんを通して地域の民生委員さんや保護司さんなど、地域のキーパーソンの方と顔を繋げていただきました。

現在も自治会に入ることはもちろん、自治会の旅行や年末の餅つき、夜警パトロールに参加しています。また、日常のあいさつや、家の外で会った時の“立ち話”なども大切にしています。放課後子ども教室のボランティアには今でも参加し続け、小・中学校の学校行事、PTA主催の行事にもできる限り顔をだし、先生方や地域の方との交流を大切にしています。小・中学校の行事に参加することで、子どもたちの保護者の方々に顔を覚えていただき、少しずつ信頼関係を作るようになります。このような関係性づくりの積み重ねが、地域で活動を続けていく大切なポイントだと感じています。

6. 行政からの業務委託の有無

○行政からの業務委託は現在ありません。

ただし、活動理念について広く社会に発信していくこと、活動財源の確保の面を考えると、今後は共に事業をやることもできたらと思っています。

現在、行政や企業からの補助金や助成金は、ほぼ活用していません。その理由としては、多くの補助金・助成金制度が、人件費や、平常時の活動に対して助成されるものではなく、新規性のあるものや活動内容の定まった案件に対して補助や助成を出しているからです。

たまり場『かっちはえて』は子ども・若者の目線で足を運びたくなる場づくりをするため、『誰でも来られる・過ごし方は自分で決める・プログラムがない自由』など大事にしていることがあります。それがもし助成金を申請するために対象や活動内容を定めているとしたら、出逢

えなかった人達がたくさんいるなど数年を振り返り感じます。

目の前にいるこども・若者がその瞬間には必要としていないのに、半年以上前に決めた計画をやらざるを得ない・数値目標を達成しないといけないというような『大人の事情』が持ち込まれることは、好ましいとは思えません。目の前のこども・若者が求める形で柔軟に活動内容の変更が可能である助成制度や、経費の中で一番大きなウェイトを占める人件費を助けていただける制度があれば、草の根活動も続けやすいく感じます。

今後、団体の継続的な運営や、活動理念を拡げていくことを考えたとき、行政と手を組むことも一つの方法として考えています。長崎市にある仕組みでいうと、市民協働推進室の行っている提案型協働事業などを検討しているところです。行政側から提案される事業が各年あるのですが、合致しなければ、自分達のようなNPO側から地域課題を提示して、福祉関係の部署、こども関係の部署などと、地域の居場所づくりを拡充していくことも視野に入れています。

7. 忙しいこどもたち（ここは自分たちのオリジナルで付け加えました）

みなさんは、一日の仕事が終わったら、どんなことをして過ごしたいですか？

お母さんやお父さんは、自由な時間ができたらどんなことをしたいですか？

家族で団欒、友達と食事、読書をしたり、映画を観たり、自分の趣味に興じる人もいるかもしれません。

会社を出たら、仕事のことは一旦忘れて、自分の時間を持ちたいと思うのではないかと思います。

ゆっくりと自分の時間をとることが、明日へのエネルギーにもなると思います。

しかし今、こどもたちにはそんな「自由な時間」がないのです。

学校が終わったら、大人によってプログラム化された塾や習い事に追われます。それらがやっと終わって家に帰ると、今度は宿題の山。週末には、金・土・日曜日分の宿題がちゃんと出されます。宿題をやらなければ家でも怒られ、学校でも怒られます。

これを大人に例えると、仕事が終わって友達と飲みに行った居酒屋で、飲み物も食べ物も全部お店の人が決めていて、飲み方や食べ方までもお店の人に注意をされるのと同じです。そうして家に帰つたら、上司に渡された書類に目を通し、企画書を書かなければいけないです。翌日きちんと提出できなければ怒られます。想像してみてください。そんな生活が、毎日毎日繰り返されるのです。

こどもたちは、一体いつ、休憩するのでしょうか？

疲れてヘトヘトになったこどもたちが、自分を守るために病気になります。溜めこんだ気持ちをどうしていいかわからずになんしゃくを起こしたり…心身に不調を訴えるのも、無理はないと思います。

8. 私たちの考える“あそび”とは？

そんなこどもたちの心を癒してくれるのが、友達との「あそび」の時間です。おもいきり走り回ったり、叫んだり、笑ったり、時にはぼんやりしてみたり…自分の好きなように、自由に過ごす時間。心のバランスを整えて、明日へのエネルギーを蓄えます。

ここで、とても重要なことがあります。私たちの考える“あそび”とは、こどもが「やってみたい！」と心から思い、その子自身が創り出してゆく豊かな“自由あそび”的ことです。「あそび」とは、大人に準備された体験プログラムや集団遊び（大人が準備した流しそうめんや、大人がルールを決めたドッヂボール大会や宝探しゲーム等）などの「遊ば

せ活動」ではありません。また、大人からしたら何とも無駄に見える、「何もしない時間」“のんびり・ゆったり・ぼんやり”として過ごす時間がとても大切です。

今、その「自由な時間」があまりにも少なくなりました。「はあ疲れた」「忙しい」「時間がない」「もっと遊びたい」そんな声がこどもたちから聞こえています。皆、習い事や塾、宿題に追われ、"将来のため"と大人から用意された体験プログラムや遊ばせ活動で時間を埋められているからです。その結果こどもたちは、心も体も自由に過ごせる時間がとても少なくなりました。

かっちはでこどもたちが繰り広げる遊びには、例えば、ひたすら穴を掘る、木を燃やす、岩に泥を塗りたくる、石を碎いて砂を作る、冬の雨の日に水遊びをする、足で風船バレー等々、他にもこどもたちが産み出す遊びは無限大です！中には「ダラダラしに来た～」と言ってかっちはで来る子もいます。それは一見すると、将来には何の役にも立たなそうに見える、何ともバカバカしいものばかりです。しかし、こどもの遊びは常に AKB、「A あぶない・K きたない・B ばかばかしい」の3点セットです。こどもたちは、自分が「やってみたい！」と思ったことをおもいきりできた時に「あ～、楽しかった！」と、実際に清々しい表情で言います。

「明日もきっとまた楽しいことがある！」こどもたちが、毎日そんなことを想いながら眠りにつけるといいなと思います。そして、未来を担うこどもたちに、こどもらしいこども時代を手渡すことが、私たち大人の責任だと考えています。

回答者： 片山薰子 さん



もとは別荘で、素晴らしい眺望。夜景も素晴らしい



てつなぐ案内板



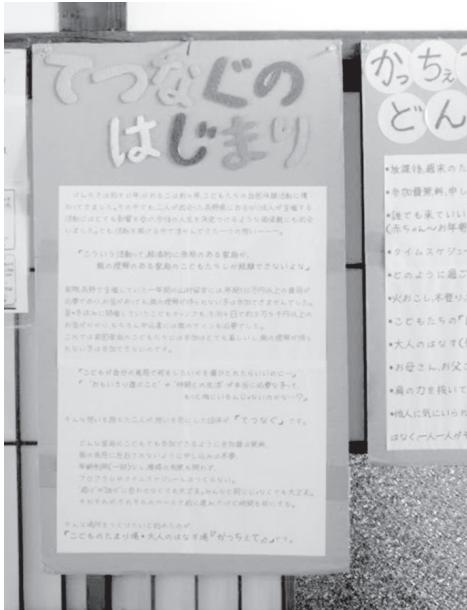
てつなぐの庭にあるぶらんこ



つなぐの庭にあるハンモック



てつなぐ内部

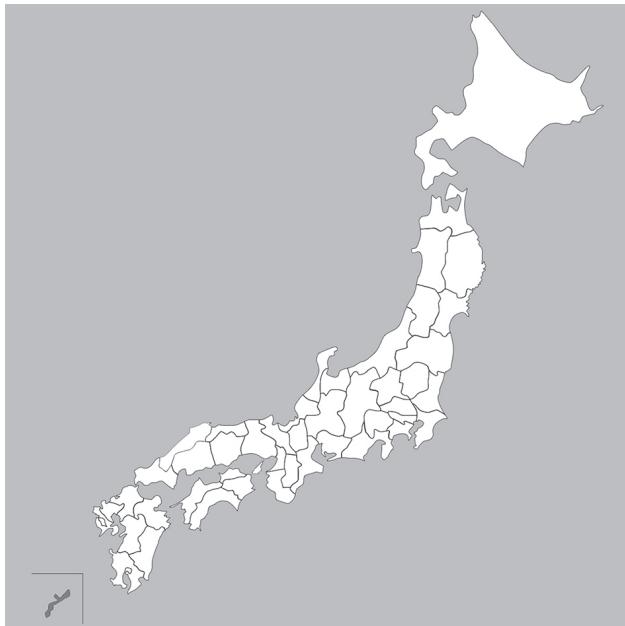


つなぐの説明



てつなぐ壁いっぽいの黒板

沖縄県島尻郡 南風原町



自治体基礎データ

自治体基礎データ

【人口】38,011人

【面積】10.72km²

【出生数】平成 28 年度： 人 平成 27 年度：569 人 出生率 15.2%(人口千対)

【合計特殊出生率】 平成 20 年度～平成 24 年度：2.09

【人口流出人数】 平成 28 年度：転入 2,063 人 転出 1,797 人
平成 27 年度：転入 2,108 人 転出 2,140 人

【未就学児童数（5 歳以下）と世帯数】 3,428 人 世帯

【未就学児童の年齢別数と保育状況】（2017 年 4 月時点）

5 歳児：1 号認定 397 人 2 号認定 107 人 在宅 人

4 歳児：1 号認定 195 人 2 号認定 312 人 在宅 人

3 歳児：3 号認定 0 人 2 号認定 388 人 在宅 人

2 歳児：3 号認定 395 人 在宅 人

1 歳児：3 号認定 423 人 在宅 人

0 歳児：3 号認定 217 人 在宅 人

【保育所待機児童数】 人

【保育所・認定こども園・幼稚園・地域型保育設置状況】

（2017 年 4 月時点）

保育園：公立 1 件、私立 11 件

認定こども園：計 件（公立 件、私立 件）

（幼保連携型 件、幼稚園型 件、保育所型 件、地方裁量型 件）

幼稚園：公立 4 件、私立 1 件（新制度に移行している幼稚園 件、移行していない幼稚園 件）

【子ども・子育て支援関連予算額】

平成 28 年度：3078520000 円 平成 27 年度：2439280000 円

【それぞれの施策を進めるための府内体制について】

府内組織数：

参画部署名：こども課、保健福祉課、国保年金課（民生部）教育委員会

【子ども・子育て支援事業について】（地域子育て支援 13 事業及び母子保健の実際）



南風原町役場

1. 子育て世代包括ケアに関する計画と事業内容

子ども・子育て支援事業計画及び母子保健計画。母子保健計画はコンサルを入れずに2年をかけて保健福祉課の保健師らで見直し作業を進めた。母子保健事業などを子どもの成長発達を理解し支えるための学習の場とすることが、課題解決に不可欠との認識の元、妊娠期からハイリスクのみならず町の実態把握と関係機関の連携強化を進めている。切れ目のない支援実現のため、支援を必要とする対象者と支援の実態がひと目で把握できる記入表などを作成、実態把握と関係機関との情報共有に努めている。南部保健所主宰の産科医療機関連携会議が発足。ただし、小児科医との連携はこれから。

母子手帳配布時に面談を行い、気がかりのある人はフォローする。把握しながら、地域保健師、児童家庭相談員、CSWなどと連携して対応している。

こども課と南風原町社会福祉協議会（以下、社協）とで、勉強会を重ね、連携強化に努めている。健康づくり班と社協のCSWとが地域で連携、定期的に会議で情報共有を図っている。体制的、物理的にも話しやすい環境。

虐待通報は増えており、包括的に支援を行っている。

2. 利用者支援事業の詳細

こども課としては窓口にコンシェルジュを置く特定型で、保育所待機児童に対応。

しかし、社協などとの連携によるアウトリーチにも重きを置いており、「ひとりぼっちの子どもがいないまち」を目指し、子ども元気ROOMの利用による要保護児童対策協議会のリストに上がってくる子どもたちへの生活支援を通して親支援を行うなど、独自の事業によるメニューの開発と地域連携を進めている。

3. 地域保健福祉をはじめとする地域づくりに対する自治体としての考え方

民生部の総務的なことも担うこども課が、地域福祉推進計画の主管。子どもから高齢者まで、分野にこだわらない支え合い、共生の地域づくりを目指している。字・自治会単位の小地域福祉圏域を最小単位とし、中学校区ごとの学校区福祉圏域、まち全域の地域福祉推進圏域の3層で圏域を捉えている。現在、19の字・自治会があり、それぞれ福祉活動を展開している。

審議→答申→改善というPDCAサイクルをきちんと回す。指標はアウトカムと目標数値。

4. 介護及び高齢者施策と子ども・子育て支援施策との連携事例の有無

ミニデイサービスでの保育所との交流。

5. 地域保健福祉に関する協議体について

ア) 協議体の有無

あり。2層

イ) 協議体がある場合の体系と陣容

1層=社協。2層は一部社協。

地域包括支援センターは直営。

小地域福祉ネットワークとして、字ごとの公民館で、さまざまな行事を行っている。

7. 生活支援コーディネーター配置と人材養成についての、今後の予定

中学校区にひとり=2名。

回答者：民生部こども課長 前城 充さん

民生部保健福祉課長 大城 美恵子さん

社会福祉法人南風原町社会福祉協議会 事務局長 島袋 康史さん

○ (ヒアリングを通しての自治体考察)

・南風原町では子どもの貧困対策を「孤立対策」と呼んで取り組んでいる。平成28年度からスタートしたのが「子ども元気ROOM」。365日、夜22時まで支援を必要とする子どもに対応し、生活指導、学習支援、食事の提供、キャリア形成などを実施している。養育支援のために送迎も実施。課題を抱える家庭のドアは堅く閉じられ、容易に援助を受け入れようとしないことが多いが、わが子が送り届けられるのだから、ドアは開く。保護者は最初、拒否反応を示すが、子どもが安定すると心を開き保護者も変化していく。子どもへの援助を通じて、親への援助にもつながっている。始めた頃は、この取り組みの意義や効果について、周囲の多くが懐疑的だった。しかし、1年取り組んで開いた報告会で、フロアから子どもの担任教師が親子の変化について報告、周囲の見る目は好意的になり、講演や研修の依頼が来るようになった。

・わが子が小学生時代にPTA会長をしていた前城さんがこども課長となり、要保護対策児童のリストを見て驚いた。見覚えのある名前があつたからだ。少年野球チームで活躍していた子どもで、中学進学後も活躍が期待されていた。が、彼の家庭は経済的に厳しく、部活の費用を出すことができず、野球を続けることができなくなり、不登校になっていたのだ。PTA会長であっても、彼の家庭の事情をまったく知らなかつた。不登校の原因にも家庭のさまざまな事情が関与しているのだと、痛感した。「貧困や虐待の連鎖を断つ」。ここから南風原町の新たな取り組みが始まった。

・貧困の課題として、若年出生率、高校不登校率、高校中途退学率、中卒後の進路未決定率の高さに注目。同県では離婚率が高いが、その理由は夫の生活力がないことであり、その点は中卒とも関連。ひとり親家庭では、昼間働く場がないために夜の仕事に就き、子どもは夜、親がいない寂しさから特定の家をたまり場とし、夜間徘徊や非行に発展、不登校が増えるという連鎖が生じる。中学校で不登校のまま卒業すると若年出産にもつながるなどリスクが高いと認識、小学校の不登校児をフォローしてゼロにするか、孤立する子どもを減らすという観点で包括的に取り組んでいる。

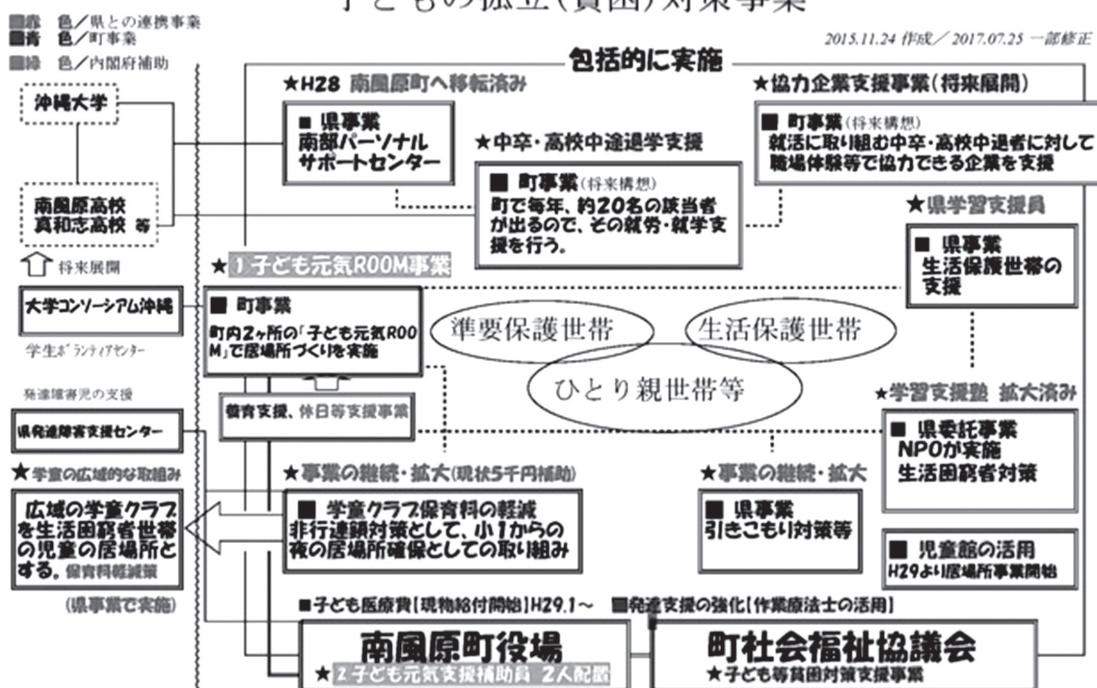
6. 地域団体・市民活動団体・企業などとの連携の状況

見守り部隊として、福祉施設、デイサービスの事業所、新聞販売所、生活協同組合、ヤクルトなど。関係者間で情報共有を図っている。

子どもの孤立(貧困)対策事業

2015.11.24 作成／2017.07.25 一部修正

包括的に実施



・ 13 ・

○町でワンショット○

妊娠婦 及び 乳幼児割引が、認可
2017年5月29日(月)から実施

認可割引 種類	=	『妊娠婦』・『乳幼児(幼稚園児) 』・『障害者』・『免許証返納高齢者』
------------	---	--

※上記のお客様は、1割引対応

《新規追加》妊娠婦割引 → 母子手帳の確認
《新規追加》乳幼児割引 → 同乗者の方(親御さん)
(※割引の併用はできません。)

合資会社 つきしき

タクシー料金、妊娠婦と乳幼児割引ですって

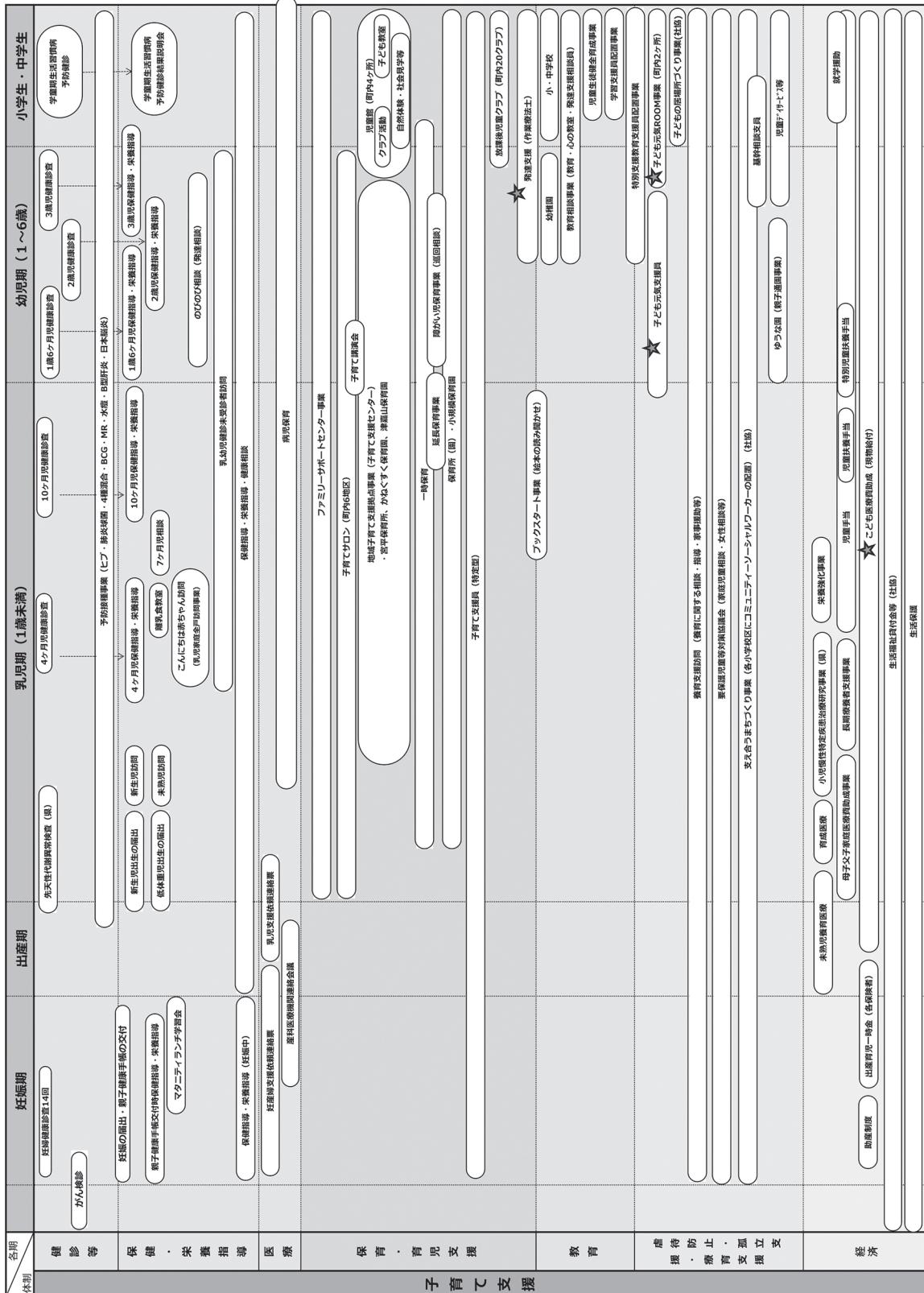
南風原町子育て世代包括支援の仕組み（南風原版ネウボラ全体会）

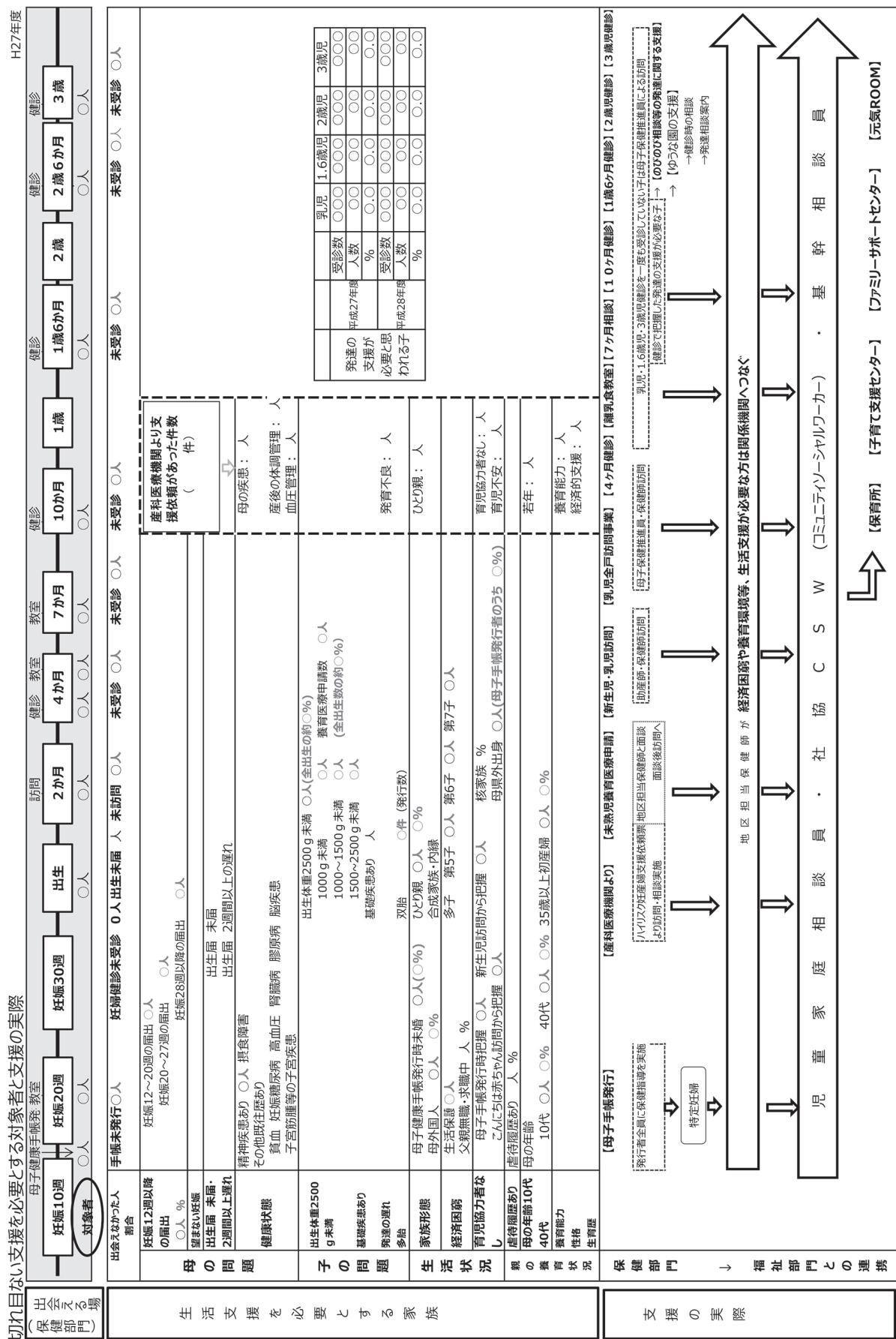
* ネウボラとは「助言の場」を意味するフィンランドの言葉

南風原町が目指す子育て包括的方向性→『妊娠期から子育て期において切れ目ない支援』

①地域の特性に応じ、「専門的知見」「当事者目線」の両方の視点を活かし情報を共有
 ②どの分野においても個別ニーズを把握し必要なサービスを円滑に利用できる。

20171208





沖縄県 南風原町 一般社団法人力ナカナ

団体基礎データ

所在地：沖縄県島尻郡南風原町字兼城 280

従業員数：4名

ホームページ：

キッズレストラン カナカナ（子ども元気 ROOM）

<http://ogaoga.ti-da.net/>

キッズクラブ カナカナ（放課後児童クラブ）

http://kidskana.wixsite.com/club

事業概要

事業別利用者数と内訳 子ども元気 ROOM 利用者 15名

事業の運営体制（スタッフ数など）

キッズレストラン

学童クラブ

子ども元気 ROOM スタッフは常時 4 名体制

ボランティアおよび学生ボランティア。

実施事業サービスと法令との関係 放課後児童健全育成事業（法定）

沖縄子どもの貧困緊急対策事業（内閣府）

設置および運営財源 キッズレストランおよび学童クラブは民設民営。

学童クラブについては、事業補助金および支援員処遇改善補助金、家賃補助金などが出ている。

子ども元気 ROOM は内閣府の沖縄子どもの貧困緊急対策事業の一環で、運営補助金が出ている。

1. 主たる事業

学童・キッズクラブカナカナの運営。

キッズレストラン・カナカナの運営。

子ども元気 ROOM の運営。 など。

2. ここに至るまでの経緯

わが子が年子で生まれ、外出もままならない大変さだったので、自宅を開放してキッズレストランを開業、現在に至る。さらに、わが子の小学校入学に際し、学童保育の必要性を感じ、自分が思い描いている学童を作りたくて、学童クラブを開設した。こうした取り組みが、子ども課長の前城さんの目に留まり、子ども元気 ROOM にも取り組むこととなった。南風原町子ども・子育て会議委員も務める。

食へのこだわりをもち、自ら豆腐マイスターやお魚レシピ伝道師の資格も持っており、学童クラブも子ども元気 ROOM とも、食事面を大切にしている。

子ども元気 ROOM 事業は、金、土、日及び祝日の週末型預かりで、15時から22時。現在4歳から小学6年生まで15名預かっており、兄弟姉妹もいる。食事支援、文化的活動体験、キャリア教育、学習支援、生活習慣の改善が主な内容。食事はバイキング形式で、子どもたちが食べたいメニューをみんな一緒に作る。週末なので、海遊び、潮干狩り、公園遊びなど、いろんな体験ができるようにさまざまなところに出かけるようにしている。送迎を生かして、親にも声をかけ続け、一緒に子育てやっていこうという関係性を作るよう家庭支援も行っている。毎週第4日曜日にはカナカナ★キッズDAYと名づけ、地域の子に声をかけて、食などのイベントを開催、子どもの孤食対策と新たな発見の場となっている。毎回30～40名の子どもたちが集まる。地域

の子どもたちにも活動が浸透、何か楽しいことをしては！と子どもたちが集まるので、食事を出す。子どもたちの様子から発見があり、気になる子は学校や支援員さんにつなぐ。

3. 関わって来たひと、もの、おかね

4. 運営のコツ、運営上の苦労など

子ども元気 ROOM を運営している場所は、キッズレストランも運営している。乳幼児連れ親子の居場所として、メニューには離乳食用のおかゆもある。授乳室、子どもにも対応したトイレ。レンタルボックスも運営しており、母親たちが手作り品などを委託販売、社会復帰などの一助となっている。このほか、ベビーマッサージなど毎日のように親子向けのメニューを開催、気軽に立ち寄れる場を演出している。

道路からのアプローチが緑のトンネルで、そこを抜けるとプランコがある庭とアロワナの水槽などがあるテラスになっており、庭から建物に入るつくりになっている。わくわくしながら居心地のよい別空間に誘われていくイメージ。広めのスペースにキッチン。親しい友人の家を訪ねたかのようなくつろぎが醸し出され、子どもたちからも「おうちみたい」と好印象。子連れでの外出のしづらさから始めたレストランゆえ、自らが「こうだったらしいな」をこつこつと実現させてできた空間だからだろう。

5. 地域における連携体制とその実情

南風原町こども課、社会福祉協議会、民生委員児童委員、教育委員会、学校、地域サロン、病院、幼稚園・保育園、保護司、児童館、無料塾などの地域資源。

学生ボランティア

近隣の皆さん。ご近所へは、焼きたてのお芋を、子どもたちが配ることもある。

6. 行政からの業務委託の有無

ア) 委託を受けている場合の委託内容と行政との関係性

放課後児童健全育成事業（学童保育事業補助、家賃補助、支援員等処遇改善事業補助）

沖縄子どもの貧困緊急対策事業（子ども元気 ROOM 事業補助金ほか）

回答者：代表理事 松田かなえさん



カナカナのアプローチ



カナカナのプランコ



カナカナ掲示



カナカナ授乳コーナー

沖縄県南風原町 認定NPO法人侍学園スクオーラ・今人 沖縄校

団体基礎データ

所在地：沖縄県島尻郡南風原町字山川 449-5

従業員数：沖縄校としては 9名

ホームページ：<http://www.samugaku.com/>

事業概要

これまでの事業の歩み 2004年4月開校。沖縄校設置は2016年4月。

事業別利用者数と内訳 子ども元気 ROOM 利用者 15名

事業の運営体制（スタッフ数など） 子ども元気 ROOM & フリースクール スタッフは9名

実施事業サービスと法令との関係（ex. 介護保険、子ども・子育て支援新制度事業） 沖縄子どもの貧困緊急対策事業（内閣府）

設置および運営財源 子ども元気 ROOM は内閣府の沖縄子どもの貧困緊急対策事業の一環で、運営補助金が出ている。

1. 主たる事業

フリースクールの運営。

「サムガク沖縄校アフタースクール Smile すみれ」（子ども元気 ROOM 併設）の運営。

2. ここに至るまでの経緯

長野県上田市で長岡秀貴さんと彼の元教え子4名が設立したフリースクール侍学園の沖縄校。侍学園では、自ら進むべき道を探すための学び舎として、それぞれにあわせたさまざまな経験を通して、「基本的な生きる力」を身につけることを最大の目的としている。那覇市の若者支援を行うNPO法人との協働で居場所作りを始める企画もあったが、南風原町の子ども元気 ROOM 事業も兼ねたサムガク沖縄校アフタースクール Smile（すみれ）を運営するため南風原町に拠点を構えた。

子ども元気 ROOM 事業は南風原町在住の児童のみを対象としているが、Smileとしては、南風原町以外の児童も受け入れている。

子ども元気 ROOM 事業としては、月～木 15:00～22:00 受け入れ。

Smile としては、月～金の下校から 19:00、土曜日及び長期休みの 7:30～19:00 受け入れ。

学校に行きたくない子も障がいのあるあるなしに関わらず、すべて送迎を行い、食事付き。

沖縄の子どもを元気に、孤立させない。カナカナが週末孤立に対応している一方、サムガクは地域体制の隙間を埋める開所体制で、支える。子ども元気 ROOM 事業としては、2カ所で365日稼動支援を実現。

3. 関わって来たひと、もの、おかね

校長の墓目崇さんは、大学で児童福祉を学び、出身の岩手県で高齢者福祉の現場にいたが沖縄に移住、「地域若者サポートステーション」で若者支援をやってきた。得意なのは居場所作り。

4. 運営のコツ、運営上の苦労など

「誰のための支援なのか」を常に考える。

生活スタイルに合わせて、だれでも、どこからでも通えて、思い切り笑顔になれる、こどもたちの放課後・休みの日の居場所が欲しいという声にあわせて、心に寄り添い、誰でも通えるまなび舎、共に育つ場

作りを心がけている。

スタイリッシュな外観の建物の1階以外すべてを使っている。建物の真ん中が吹き抜けになっており、そこに螺旋階段がしつらえられ、各フロアをつないでいる。ベランダで亀の家を作りながら亀を育てたり、子どもたちに任せて本を選んで造った書棚やドラムセットやギターなどが置かれたスペースなど、ここでは、年齢対象を限定することなく、ここで過ごす子どもたちの思いも汲んだ空間作りがなされており、誰もが思い思いに好きなことをしてすごせる。宿泊はしないが、キッチンやシャワーもあり、ここで暮らしているかのよう。

5. 地域における連携体制とその実情

南風原町こども課、社会福祉協議会、民生委員児童委員、教育委員会、学校、地域サロン、病院、幼稚園・保育園、保護司、児童館、無料塾などの地域資源。

6. 行政からの業務委託の有無

沖縄子どもの貧困緊急対策事業（子ども元気 ROOM 事業補助金ほか）

回答者：沖縄校 校長 墓目 崇さん



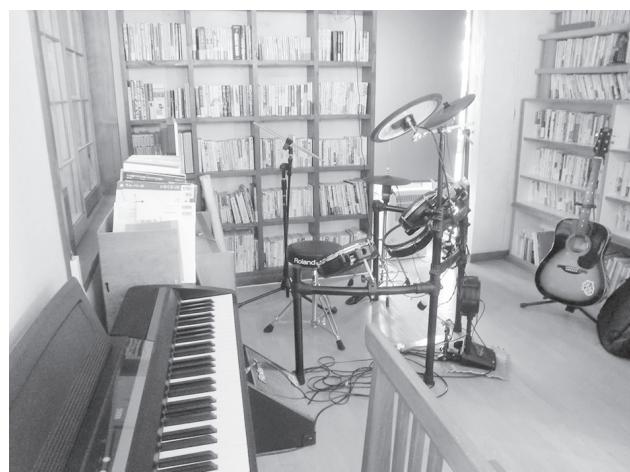
サムガク 外観



サムガク アプローチ



サムガク エントランスの掲示



サムガク ドラムセットと書棚

2017年度地域まるごとケア・プロジェクト 地域人材交流研修会 in あきた 「みんな、つながるべ～ 多世代共生のまちづくり」参加者アンケート集計結果

1.この研修会へ参加してみようと思った理由をおきかせください。

- ・長年住み慣れた場所から田舎ライフに突入（引越し）して“つながり”的重要性をひしひしと感じていたので
- ・子ども・子育て・子育て支援の話を聞きたかった、意見交換したかったから（5名）
- ・違うジャンルの人と接することができる
- ・地域の課題をさまざまな世代の方と話し合ってみたかったため
- ・地域づくりに取り組みたいから
- ・子育てに興味があつて
- ・今後の参考のため（居場所作りに興味があるので）
- ・自分がやりたいと思っているコトに+になればと思い参加した
- ・元気を分けてもらいたかったから
- ・いろいろな方との交流を期待して
- ・今後のまちづくりとのかかわりを知りたかったため
- ・子どもを含めた、今後の社会に興味があるから
- ・多世代共生というキーワードに引かれた（2名）
- ・どのような人が参加しているのかを知りたかった
- ・子育て支援に興味があり、シルバー世代とコラボできればと。何かよい方法はないものかと
- ・秋田の子育て支援や子育ち支援を変えたい
- ・タイトルがよかった
- ・地域力・住民力向上のため
- ・子育て支援関連の事業をしていることと、中学生と小学生の子育て中のため、公私共に興味があつて
- ・地元で内容の深い話などを聞いて気づくことがあればと思った
- ・つながりたい。NPOの人のエネルギーをもらって元気になりたい
- ・行政で働いているが、民間の団体とかかわりを持つため

2.研修会の感想をお聞かせください。

- ・スピーチする方、スタッフの方々がとてもバイタリティある方ばかりで、気持ち的にも、また何かやれたらという思いになった
- ・新しい視点をたくさん得られ、有意義なひとときだった
- ・盛り上がってよかった。まずは自分からやれることをと思った
- ・課題の共有で終わってしまったので、次のアクションにつながるようなところまでいけば、さらによかったと感じた
- ・秋田の良さをあらためて教えてくれてありがとう
- ・感心がずっと続いた会だった（興味深かった）
- ・いろいろな人々の意見聞けたのがよかった
- ・知らないことだらけだった！ 現状はもっとみな大変だった！ 考えが甘かった。そしてみなさんのイキオイがすごかった！
- ・私の知らないところでたくさんの方々が今も活動されていて刺激をもらった
- ・楽しかった（3名）
- ・パワーポイントのコピー（画面のコピー）が欲しかった
- ・活動団体さんの行っている活動が大変面白そうに思った。楽しいから続くのかも！？
- ・参加できて本当によかった！
- ・楽しんで、まず第一歩踏み出すことが大切だと
- ・実践を聞くことができてよかった
- ・前半の講義については、文書などの資料が全員分あればよいと思った
- ・ざくばらんにさまざまな話ができる楽しかった
- ・司会の方の乗せ方が上手で話やすかった
- ・よい交流、意見・情報交換ができるよかった（2名）
- ・パワーのある方々の熱意のある取り組みに感動した。何か関わることができると嬉しい
- ・締めのお二人の言葉が素晴らしかった
- ・子育てだけではもったいない！
- ・とてもよい、わかりやすい進行だった
- ・マイクの関係なのか、はっきり聞こえぬ部分があった。自分のせいなのか、マイクの持ち位置なのか？

- ・みんなの明るい気をもらった。よかったです！
- ・子育ての内容が薄かったかも

3.地域まるごとケアを実現する地域づくりに向けたあなたの思いをお聞かせください。

- ・“地域包括”の重要さを確認した（高齢者を地域に戻すだけのものではないということ）
- ・一人ひとりが“やってみよう！”を持ち帰り、広がっていく未来を夢見ている
- ・プレイヤーが少ない現状を考えると、一緒のほうがやりやすいのではと思う
- ・年齢、性別、空気など見えない壁が取っ払われるよう活動して行きたい
- ・何が地域づくりを妨げているのか、根本的な原因を見つけて行きたい
- ・カフェのようなお金がかかる場所でなく、誰でもこれるような場所を作れたらいい。
- そこに行けない人たちにも目を向けていきたい
- ・何かひとつの課題で動き出す中で、ネットワークが生まれる
- ・まずは自分の身近なコミュニティから実践して行きたい
- ・地域での連携をどのようにするのか。子供とのかかわりのある地域での各団体との連携が重要でないのか。＊町内会連合会、児童センター運営委員会、福祉協議会、子育て団体など。地域性を活用
- ・地域がまるごとみのことを考える社会になるために、目を背けない行動を起こしたい
- ・地域の人を知ることは大切だと考える
- ・地域のことは地域全体から意見やアイデアを出し合う総合力が必要
- ・今日ここで出会った方がご縁となりさらに広がっていくことと思う。地道にこつこつと続けていく
- ・子育てのみならず、高齢者など世代を超えた人たちによる地域づくり（町内会の延長みたいなもの）
- ・ぜひとも大々的に進めていただきたい
- ・シルバー世代なので、サポートに徹したいと思っている
- ・秋田の中心部から声を上げていまーす！
- ・区分け仕分け大嫌い。みんなが助け合える社会、実現したい
- ・つながることがコミュニケーションづくりのはじめと思った
- ・小さいことから実践者として関わって行きたい
- ・地域力・住民力をつけたい
- ・国の財政が厳しくなる中、人間本来人とのつながりを大切にお互いを尊重しあって生きていくことは大変重要と思われる
- ・足の引っ張り合いをやめること。自分が参加して楽しい思いの中にいないと
- ・理想の地域だと思う。少子化が止まって、みんなが生き生きと、わくわくを楽しんで生きられる社会の中核になりそう
- ・少子高齢時代における秋田を地方創生のモデルとしたい

4.地域まるごとケア・プロジェクトへのご意見・ご感想などがあればおきかせください。

- ・今後も定期的に開催を
- ・またぜひ参加したい（4名）
- ・秋田県には、こんなにも子育てについて話し合える方がいるんだと知った。びっくり！
- ・お三方の意欲からの行動、すごいと思う
- ・今後、地域での「つながり」をどのようにもってやってゆくのか考えたい。子どもの居場所のあり方を考えたい
- ・内容もよいか、興味ない人も引っ張っていけば広がっていく気がする
- ・縦割りしないことは重要
- ・チラシがもう少しやわらかいデザインだともっとよかったです。お母さんとかもっと参加してもらいたかった
- ・とてもすごい勢いを感じた。若い世代が変えるお手伝いをしたいと思う
- ・素晴らしい取り組みと思う
- ・プロジェクトのデータベース化、発進力について、やっていただきたい
- ・これからも新しい発想の活動を

■ 2017年度地域まるごとケア・プロジェクト 地域人材交流研修会 in きよせ 「私たちの手で支え合う0～100歳の地域まるごとケアのまちづくり」参加者アンケート集計結果

1.この研修会へ参加してみようと思った理由をおきかせください。

- ・地域資源について考えたいと思ったから
- ・仕事に役立つ
- ・地域まるごとケアのまちづくりはこれから必要なことなので
- ・必要とされる事業と思う
- ・情報交換と人脈づくり
- ・「0歳から～100歳」のキーワード。行政の縦割りとは違う丸っとした場づくりに興味があった
- ・生活支援コーディネーターの方のお話をきけてよかったです
- ・清瀬市への住みはじめ日が浅いので、地域とのかかわりを持ちながら地域に根付いていきたい
- ・テーマと自分の興味関心と合致していたから
- ・0～100歳までにひかれて
- ・子育てのことからまるごとの支援に向かって勉強したいと思った
- ・団体にすすめられたので
- ・これからまるごと支援をもっと知りたいと思った
- ・地域まるごとプロジェクトに興味があった
- ・子育て支援の実績のあるピッコロさんが介護にとりくむということで具体的な内容を聞きたかった

2.研修会の感想をお聞かせください。

- ・介護サポート?のサービスの全体像も聞きたかった
- ・生活支援という名前は広くいいと思った
- ・これからの取り組みが、次の仕組みを作つて助け合いになるといなと思った
- ・地域支援コーディネーターの方と直接お話しでき、知識が少し増やせたのが良かった。これからも顔見知りになり気軽にお話しできそう
- ・とても良かったと思う。やはり何回も聞いてほしい
- ・色々な方々からの実践や思いを伺うことができて、とても有意義な時間を頂いた
- ・様々な体験を持つ人がいて実体験を聞いてそれを自分の今後に活かしていきたいと思った
- ・子育て支援、高齢者支援、双方の話を伺うことができ、共通する点やそれぞれの課題について考えることができた
- ・今までに「胎動の時」という印象。家庭支援について総合的に学ぶことの必要性を感じた。社会福祉士+カウンセラー? (傾聴) 子育てだけ、介護だけではない様々に対応できる支援の仕組みを模索しなければ
- ・高齢者の制度作り等参考になった
- ・具体的な提案を期待していたのですが…
- ・地域まるごとケアのまちづくりはこれから必要なことなので
- ・生活支援コーディネーターの仕事が少しわかつた
- ・介護、育児両方終わったが、最も大変だった時ダブルケアと思わずやっていた。何もかも中途半端というか、やって燃え尽きた感じでもう少し余裕があれば、子どもにも逝く人を見送る時にもう少し何とかなったのに…と。そういう意味でこれからのこういう活動はとても大切だと思う
- ・様々な立場の人と話ができるよかったです

3.地域まるごとケアを実現する地域づくりに向けたあなたの思いをお聞かせください。

- ・制度や職種を超えた人とのつながりがまず大事。そこからやっていく必要があると感じた
- ・介護者も疲れているので生活支援コーディネーターさんなどとK-net高齢者家族版などを各地域で実施してみては
- ・私は学校を中心に活動している清瀬市学校支援本部コーディネーター。学校を中心として地域の方をつなげる役目をしているので、これからも頑張っていきたい
- ・複合的な団体を探す?設立?
- ・社協と町会ともっと仲良くなろう

- ・地域住民一人ひとりのちょっとした生活の余裕、時間の空き、少しの気持ちによって互いに助け合うことができる為ぜひ実現に向かってほしい
- ・公的なしづらが多いように感じる。特に資金について。もっとオープンに活動できるよう、役所関係の方々も協力的にそして親身になって窓口となってほしい
- ・是非これからも地域まるごとケアの考えを推し進めて欲しい
- ・自然に子ども、親、高齢者が地域で暮らし、つながっていなければよいと思う
- ・今の団体ではじめたプロジェクトに協力していくと思う
- ・一人一人を大切に
- ・高齢者の団体、キーマンと子育て世代をつなぐことが最も重要だがハードルが高いなあと思う

4.地域まるごとケア・プロジェクトへのご意見・ご感想などがあればおきかせください。

- ・関わる人が笑顔でいられるような活動になってほしい
- ・とても気軽に参加できる会だと思った
- ・ありがとうございます!!想い・情熱がヒシヒシと伝わります。勇気やる気を頂きました
- ・ピッコロの始まりのときのように、高齢者と子どものいる家庭が利用しやすいマップ作りとかは交流のきっかけをみつけるのに役立たないか…



2017年度地域まるごとケア・プロジェクト 地域人材交流研修会 in たかまつ 「大家族のように居心地のよい地域の居場所をつくろう」参加者アンケート集計結果

1.この研修会へ参加してみようと思った理由をおきかせください。

- ・これから多世代交流をしていくのに役立つと思った
- ・子どもからお年寄りまで交流できることを課題と考えているので参加してみようと思った
- ・今後の活動のために勉強したいと思った
- ・自分でしてみたいと思っていた居場所づくりに近い提案だったので
- ・地域の居場所を子どもにも繋げたい
- ・居場所の充実のため
- ・地域の乳幼児親子や子どもが気軽に立ち寄れるコツを聞きたかったので
- ・多世代交流を行っているから
- ・現場の意見をききたいと思ったから
- ・子育て世代への社会貢献活動を考えてみたく参加した
- ・地域の中でどうこれから多世代と居場所づくりをつくっていけるか参考となればと思ったので
- ・3世代交流に興味があるが、方法がわからず
- ・これから地域に貢献し、支援に携わりたいと思ったので
- ・子育て世代だけではなく、様々な人たちを支援するためにはどうすればいいか知りたかった
- ・高松の現状を知りたかった
- ・多世代交流に関心がある
- ・一同に会することのない様々な所属団体の人が集まって直接話せる機会だから
- ・奥山さんの話が聞きたかったからです
- ・地域とのつながり(シニア)を学びたかった
- ・地域で親子の方と高齢者の方がつながって交流する方法を知りたかったので
- ・仕事以外で自分を活かせることを探している
- ・地域の交流高齢者の居場所づくりを考えている
- ・人と人とのつながりが薄くなっている現代、大家族のようにみんなが集える場所づくりのアイディアがあれば聞きたいと思った
- ・高齢者ひろばをしているので

- ・自分の子どもも地域で育てていけるようにまずは自分の地域を見て参加したいと思う
- ・地域のキーマンとのつながりを深めたい
- ・また交流したい
- ・人と人がつながり、だれも一人でさみしい思いをしている人がいなくなるように頑張りたい
- ・誰もが気兼ねなく利用できる環境整備ができればいい
- ・高齢者が子育て親子とハブ的な役目になるように実現可能のことからする
- ・中間世代が積極的に参加するといいと思います
- ・ハードルは高いが挑む価値がある
- ・多世代がつながることの重要性 たて、横、すべてを包括した支援の必要性
- ・地域の方と交流をしっかりとつ
- ・「みんなで子育て」を実感できる地域であります
- ・行政はどんどん宣伝、援助していってほしい
- ・まず自分が動くこと、そして仲間を見つけることかな?と思った
- ・ひとの大切さ(つながり)を感じました。身の周りからつながりづくりをしていきたいと思った
- ・子ども(0~3)とおとしより以上の交流だけでなく、0~幼稚園、小学校…お年寄りまでみんなが立ち寄ったり、集まったりできる場をつくることができれば放課後児童やひとり親家庭の問題もいくらか軽くなるのではないかと思っている

2.研修会の感想をお聞かせください。

- ・いろんな方・立場の話を聞いて良かった(2名)
- ・大変参考になった
- ・いろんな職種の方が集まって、いろんな角度から話ができるよかったです
- ・とっても良かった(2名)
- ・たくさんのヒントをいただけて良かった
- ・多世代の方と意見交換でき、これからできる事が見えてきた気がする。何より人とつながれた
- ・色々な方と意見交換ができるよかったです
- ・ワークショップの時間が多く、お互いの考えを知ることができてよかったです
- ・他県の例がとても良かった
- ・とても充実できた
- ・活気があってよかったです
- ・立場の違う人と交流できてよかったです
- ・多職種の人が集まってよかったです
- ・様々な業種・多職種の方と交流・意見交換できてよかったです(2名)
- ・いろいろな役職の方と話し合え意見が聞けてとても良かった
- ・幅広い視点の意見が聞けた
- ・活躍なさっている方の元気をもらった
- ・これだけ様々な立場の方が集まるのはまれなこと 貴重な体験
- ・様々な意見や活動のお話を聞けた
- ・子育て支援だけでなくお年寄りの集まる場をされている方の意見や熱意が聞けて良かった。何かできそうな気がする
- ・普段足を踏み入れることのない領域の方がいて、顔の見える関係になれた
- ・活躍している方たちのお話は聞いていると元気になる

3.地域まるごとケアを実現する地域づくりに向けたあなたの思いをお聞かせください。

- ・わが事まる事一億総活躍プラン等地域のことは地域で支え合おうと住民に理解してもらうことで安心な地域につながる
- ・小さな挨拶、声かけからかなと思った
- ・新しい土地に保育園を移転し、新参者が地域に認めてもらうためにも地域の方との交流を考えている
- ・ひろばに来ている親子が地域で楽しく子育てできるようにと思っています
- ・自分にできる事をしていきます



2017年度地域まるごとケア・プロジェクト 地域人材交流研修会 in あまがさき 「0～18歳を地域まるごとで支えよう 子どもが真ん中のまちづくり」参加者アンケート集計

1. この研修会へ参加してみようと思った理由をおきかせください。

- ・いろいろな意見や情報を聞きたかった（5名）
- ・子育て支援に興味があったため（2名）
- ・今後を担う子育てに力を入れることが大切だと感じており、ぜひ学びたいと思ったから（3名）
- ・子育て支援にかかわる方々との交流。さらに子育て支援×他のテーマ型活動がもっと活発になれば、活動している人たちの負担も減って、幅も広がるかなと思った（2名）
- ・今後の業務に生かせると思ったから（5名）
- ・子どもの育ちにかかわる支援センターの準備業務に携わっています。さまざまな子どもにかかわる方々が集まる機会なので参加した
- ・子どもの育ちにかかわる支援センターに興味があったから
- ・児童発達管理者研修受講中で、地域とのつながりについて興味があったため
- ・発達障害のお子さんとかかわることが多いため
- ・尼崎市の子育て支援のつながりを知りたかったので
- ・地区的パワーを知りたかった。つながりたかった
- ・地域での活動、声を聴きたかったから
- ・地域で協力できることを考える機会になるとを考えたから
- ・地域で暮らすこと、地域で子育てすることに興味があった。
- ・地域での子育て支援のアイデアを得たい。地域の居場所、子ども食堂運営のヒントになればと思った。子育て支援を地域の中で考える上で参考になると思った（5名）
- ・フォーラムの題に興味を持った。「地域」という言葉に興味があった（2名）
- ・「地域まるごとケア・プロジェクト」ということばにひかれた
- ・高齢者・障害者関係のセミナーは多く出ているが、子育て関係の参加機会が少なかったので
- ・子どもからおとなへの成長と、それに大きな影響を与える0～1歳の育ちに興味があって
- ・何か自分にできることがあるかなと思いまして

2. 研修会の感想をお聞かせください。

- ・様々な立場からの話が聞けてよかった。勉強になった（13名）
- ・普段あまり話さない立場の人と話ができるとよかったです（5名）
- ・本当に参加してよかった。地域にもう一度、子どもさんに目を向けようと思う
- ・いろいろな取り組みの話だけでなく、行政以外の人との意見交換ができたことがとてもよかったです
- ・行政の方と交流ができる実のある研修会だった
- ・地区やその団体などの悩みや困りごと・よいことを共有でき、さまざまな視点から考えることができた
- ・子育ての状況を知ることができた
- ・尼崎の人の良さ・強みをみな思うところは同じであった。元気、パワーをもらえた
- ・ワークショップでの話し合いがとても充実した（3名）
- ・地域で子どもたちを支えるには、すごい数の人が必要だし、始めたら終わりがないから大変だと思った
- ・グループワークは苦手意識があり、あまり発言できなかったが、他の方の意見を聞くことができ、いろいろと感じていることが知れた
- ・発表で頭が整理され、ワークで非常に盛り上がった。顔を見て話し合うことは楽しいことだ
- ・途中で帰ろうと思ったけど、最後まで参加してよかったです
- ・なかなか実のある発表があった。わがまち尼崎もいいところだと思った。近所の子どもを大切にしていきたい。見守っていきたい
- ・尼崎市内に子育てに関心あり、やる気ある方がたくさんおられることに力強く思った
- ・同じように考えておられる方がたくさんいらっしゃって勇気をもらった（2名）
- ・自分が働いている尼崎市を改めて見つめなおすことができてよかったです
- ・皆さんの熱い思いが伝わってきた。いろいろと皆さんと話し合っている中で、子ども食堂フェスタ春・秋、公園か学校のグラウンドで開催したらという結論になり、有意義な時間となった
- ・前向きな方々のお話を聞かせていただき、力をいただいた（2名）
- ・実践されてきたことが中心なので、わかりやすかった（3名）
- ・たくさんの団体・施設・行政の方が集まっておられて驚いた
- ・自分の住んでいる地域でも同じような活動ができればよいなと思った

3. 明日からの活動に生かせるように、がんばりたい！

- ・多職種の方々の話を聞けてよかったです。もっと勉強したいと思った
- ・第一部の講師が多かったので、それぞれの方が早口になる傾向があった。グループワークは対象者の職種を絞ったときに、さらに有効なのでは？
- ・企画会議的に発展するとよいのでは？

3. 地域まるごとケアを実現する地域づくりに向けたあなたの思いをお聞かせください。

- ・私も何か力になれることがあれば、ぜひかかわっていきたい。何かを始めたい（2名）
- ・誰もが気にし合える社会になる。おせつかいな街づくりをしたい（3名）
- ・自分の今の立場で地域づくりに役立てることがあると思った。それをどう実現していくかだと感じている。自分が出来ることを一つ一つ取り組んで行きたいと思う（4名）
- ・市職員として非常に学ぶべきことがあり、立場は違えどこれから協力してやっていきたいと思った
- ・知らないことが多くあり、知識として持ち帰り、今後友人や職場に情報発信ができるようにしていく。まずは広報から（2名）
- ・人の輪の中へ入っていくこと。ともかく声を出して思いを伝えていく！（2名）
- ・地域の力を広げていければと思う。地域全体が集団で支えあう意識が必要だ
- ・行政と地域、さまざまな人がかかわって新しいことを始めていきたい
- ・今日のワークは子育て分野だけでなく、高齢者・看取り・防災にもつながり、地域まるごとケアの意味がすごくよくわかった
- ・地域や家族における人間関係を再構築する必要がある
- ・まずは顔と顔の見える関係をつくっていきたい
- ・つながりを続けていきたい。挨拶ができる町になつたらいいな
- ・日ごろの付き合いをつながりにできるように、細かく声かけをしていきたいと思う
- ・子育て世帯と高齢者世帯の交流が大事と考えた！
- ・子育て、障害、高齢者の区別なくつながりづくりをすることが大切
- ・まずは人。当てにできる社会資源を増やす。地域住民にもっと参加して欲しい
- ・思いやりを持って積極的に子どもたちやお年寄りの方の話に耳を傾ける努力をする
- ・地域づくりは子育てだけでなく、すべてのことで必要と思う
- ・一人ひとりが地域を知ること、そばにいる人を知ること。それをつなげる小さなパイプになりたい
- ・世代を超えて、自身のことだと考えていきたい
- ・どこまで組織的にするのかが課題？ 人の善意やつながりで続けたほうがいいことも
- ・尼崎市には、地域に多くの人材があるので、それを活用できれば
- ・小さな取り組みが全市に広がっていけばよいと思う
- ・子ども会や地域に活躍できる場を
- ・こういう場に出てこない一般市民に伝わればよいなと思う
- ・地域まるごとケア→高齢者と若年者とは、同じようにかかわりが大事。片方に偏らないようにして欲しい
- ・時代の変化とともにに対応についても検討が必要
- ・うちの地域は子育てや子どもに関心が薄い。園田地域がうらやましかった
- ・仕事しているから、他の人のために出せる時間や体力がない、ごめんなさい

4. 地域まるごとケア・プロジェクトへのご意見・ご感想などがあればおきかせください。

- ・またこのような場があれば参加したい（5名）
- ・貴重な時間だった（3名）
- ・グループワークに参加できて嬉しく思う
- ・定期的にこのような場があればよい
- ・貴重な報告書ありがとうございました。よく読ませていただきます
- ・大変勉強になった。レベルの高さに驚いた
- ・次の世代を温かく見守りたい
- ・今後「子どものために」活動している人が「高齢者のために」となるには難しくなると思う
- ・尼崎でぜひ全国に誇れるプロジェクト（子ども）が進めばいい
- ・今後も何か連携できればと思った
- ・面白い企画だった。地域の力を感じた

